

山形短期大学民話研究センター資料叢書

高橋良雄さんの

及位の昔話(二)

編 山形民話の会・武田 正

山形短期大学民話研究センター資料叢書

高橋良雄さんの

及位の昔話（二）

編

山形民話の会
武田正

高橋良雄さんの
及位の昔話（二）

17	16	15	14	13	12	11
大森のかしこ	狐むがし	狐むがし	狐むがし	狐のお礼	狐ど獺	狐と貉の智恵くらべ

四一	三五	二六	二一	一七	一〇	五
----	----	----	----	----	----	---

19 18

安部の保名
宝生の珠
あとがき

四七
七五
九一

11 狐きつねと貉むづなの智恵くらべ

むがしあつたけど。

むがしな、赤倉きつねに狐きつねと貉むづないであつたど。この二匹あ、化げんなどでもじよんであつたど。赤倉きつねのしだづあ、狐きつねあころすぎのころ穴さ、巢ゆ作ゆているおんだはげあえ、"ころすぎのころ狐きつね"て言ゆてつがつたど。ほうして、貉むづなどごあ、おへぐりむげあえの穴さ、巢ゆつくゆているおんだはげあえ、"おへぐりむげあえの貉むづな"て言ゆているおんだだけど。

ある時づきな、おへぐりむげあえの貉むづなど、ころすぎのころの狐きつねあ、沢ゆでひよつこりいぎあたけど。ほんで、二匹あ、沢端ゆさけつゆつゆで、しやべつたけど。狐きつねあ、

「やあ、おへぐりむげあえの貉むづな、なにが面おも白へごどあねあがや」

つけど。貉むづな、

「んだなあ、近頃つかころあさつぱり面白おもごどあねあ、んであ、どつつあ化がすなじよんだが、智恵くらべでもしてみつが」

ていうけど。ほんで狐あ、

「ほれも面白^{おもへ}な、おめあえも人化^{しと}がすんな上手^{じょん}だそだども、おれあ、まだ見だごどあねあはげあえちようどえな」

ていうごどんなて、智恵くらべすつごどんしたど。

ほうして、貉あ、

「んであ、誰がらするや」

てゆたば、狐あ、

「んであ、おれあ先^{さき}んおめあどさえぐべ。」

ていうけど。

「んだが、んでああしたおめあえこえ」

ていうごどんなて、貉待じつだど。

次の日あ、朝まからずらずらど雨こあ降ったけど。貉あ、

「はで、ころすぎのころ狐あ、今日来るつけあ、なんずしてくるおんだべ」
どもていだど。ほうしたば、村の人達^{したち}の声あすつけど。

「おーえ。天気もえぐねあし休みだべやー」

「うーん。今日あこんた天気だおん、休まねあんねあべやー」

「んであ、ただ休むもなんだ、おへぐりむげあえの貉でも捕てきて、天気祭りでもして、飲^のだらえがべ」

ていうおどあすつけど。貉あ、

「なんだ、野郎^{やろうだあ}達、おれあどこ捕るかんじよしたて、穴ん中さ入てれば、なんずして捕れるおんでねあ」

どもていだば、たづまづ来たおどあすつずおん。ほんで、貉、ごそごそ穴^{へあ}さ入てえてかぐつでだど。

ほうしたば、がづがづど穴んどご掘り出したけど。

「なんぼ掘ても出はてこねあ、この畜生^{ちつきしよ}あ。三次、お前^{にし}あ家になんばねあがや」

「あー、あるある」

「んであ、なんば持て来^して、なんばえぶすかげろちやや」

ていうずおん。ほうして、なんば持^もつて来^して、なんばえぶす始めだけど。

猪あなんばえぶすかげらつで、どうどど鼻水あ出るんだが、へづねあおんだはげあえ、のびで出はてきたけど。ほしたば、穴のそばで狐あ、

「おえおえ、どうした」

つけど。ほんで、猪ようやぐ気あつで、

「あー、えまや村の野郎だに殺さえるかんじよしたば、おめあやた仕事はや。あのひでーにおえあないなおんだや」

てきだば、狐あ、

「あーあれが、あれあ狐のかすみ屁ぺずおんだ」

「やー、あのおえであ、すんでん参つどごであえつたは。狐や、お前にしゃにあ、んまぐ騙さつたな。んであ、こんだおれだ。あした行えぐぞ」

ていうけど。

ほうして、今度こんだあ、ほの次の日、ごろの狐あ、

「はで、おへぐりむげあえの猪、今日来る筈はんだ、なんだごどして来るおんだべ」
と思もていたど。ほうして、あんまりええ天気だおんだはげあえ、穴がら出はて

日なたばこしつたど。ほうしたば、犬二匹つで、鉄砲てっぽぶづあこつちやのつこのつこど此方
来つずおん。

「なあに、あんたおのあだ来たて、おれあ穴へさ入あてればなんてもね。ほんた
おのあ」

どもているうずんは、犬あわんわんて来て、穴ねさ逃へげしめん、穴へさ入あつが入ら
ねうずん、後ともあし足くわがつで、しとふりぶち振らつでしまて、ほんでは、狐あのび
でしまたけどは。

ほうして、ようよう起おきでみだれば、鉄砲ぶづだどおもたな、ほれあ貉めあだけど。

「やーや。鉄砲ぶづに、あぶねあぐ捕しめらえるかんじよしてあえつたはや。お前も
相当やるおんだな」

て、したりあ笑たけど。

これが貉ど狐の智恵くらべで、どっちあどっちてもゆわんねくれあじよんで、
勝負あつがねがつたけど。とんびん からんこあ ねあつけどは。

(集成二八七「狐と狸の化比べ」) 話者 栗田三次郎

むがしあつたけど。

むがしな、ある所どさ狐どと獺どあいであつたど。ある時つぎ釣り人あ、川端あり歩いてたば、なんだが話声あすつけど。ほんで、ほの人しとあ聞き耳さずんを立で聞つたば、狐と獺たけど。ほうして、狐あ獺どさ、

「獺さんや。二人したりして招よび合くれあいしねあがや」

て言ゆてだあだけど。ほしたば獺あ、

「んだな、ほれあ面白おもへべな。んであ誰たれがらよぶや」

て言ゆたど。ほしたば狐あ、

「んだな。んであまづお前めえがら招よだらえんねあが」

て言ゆたば、獺あ、

「ほつが。あんまりえ。んであ、あしたおれあ家えさよばつで来こえちや」

ていうごどんて、まづ、獺あ狐どご招よぶごどんして、獺あ川えさ行いて、雑魚ざつこが

ら、かつがから鱒まで捕めあできて、魚の煮づけだ、てんぷらだ、焼魚だ、てしこでま魚料理こしえて、狐あどご待ちつたど。

ほうして、次の日なたば、狐あ、

「獺さん、獺さん、まづ、ずんぎなしよばつて来あした」

て来たけど。獺あ、

「良ぐ来てくつだ。まづ入れ」

て、狐どご家さ入つて、ごつつおえつぺあ出したけど。狐あ、

「なえだて魚捕り上手だおんだ。これあかつがのでんがぐが、じんぎなしごつつおなりあす」

ていうど、かづればえどみであん、片端がらむしやむしやど食うけど。ほうして、んめあんめあどて、夢中んなて食うなだけど。ほうして、腹えつぺあなて、あどあ入らねあくれあ食て、げつぶしいしい、

「獺さん、とでもんめあがった。こんげあえんめあおの初めでごつつおなた。おおぎんごつつおさんでした。あした、おれあ招ふはげあえ、こんだ、おれあ家さ

来てころ。山がら、雉なの兎なの捕めできて、ごっつおすつさげあえな」

て言て行たけど。ほんで、獺あ、んであ明日まだ食たごどあねあ肉料理食うえ。

なんぼがんめあおんだべなーど思たば、夜んまもろぐん寝らんねあくれあ待ちどしがったけど。

ほうして、夜あげんな待ちで、夜あげつどすぐ、狐あ家さ行てみだど。ほしたば、狐あまだ寝っただけど。獺あ、

「狐さん、狐さん。ごっつおながら来あした」

て言たば、狐あどでして起ぎできて、

「あー、えぐきたえぐきた」

て言いながら、囲炉裏んどさ据て、あどあ、てんこら吹えで、天井板ばりにらめで、動きもしねあば、しゃべりもしねあぐなてしまたけどは。獺あ、なんぼ大つき声で、

「狐さん狐さん、ごっつおながら来あした」

て、何べん叫がだて、知らねあふりだけどは。ほんで、獺あ怒で行てしまた

けどは。ほうして、暫くしたば、狐あ獺あ家さ来て、

「獺さん獺さん、さぎだ、てんこら吹きあ、あだて、なんぼ返事しであえたて、返事さんねあくて、ぶじよほしあした」

どて、詫びすつけど。ほんで、獺あ、

「ほんたごどあねあ、ほんたごどあねあ、なおたごつたらえがった。ほんでああした行くはげあえな」

て言たど。ほうして次の日、獺あ又、狐あ家さ行たど。ほうして、まだ、

「狐さん狐さん。ごつつおながら来あした」

て言たども、まだ、狐あ、前の日どおんなじで、てんこら吹えだきり、動きもしねあば、返事もしねあで、据たきりだけど。ほんで、獺あ怒で、

「人んどご騙しあがて、おれあごつつおぼりしこであままぐらて、おれあ来つど知らねあ振りしあがて、みでろ、この畜生あ何時が仇とてくえつさげあえ」

ど思て、家さ帰たけどは。

ほうしてゐるうづん、冬んなて、雪あ降るよんなて、寒くなてしまたけど。狐あ、

雪あ降るよんなたば、捕るおのあすぐ少なくなて、腹へらして、今ごろ獺あなんずん
しったべど思もて、川端えさ行てみだど。ほうしたば、獺あ、大つき鮭よとて、川端で
食ったけど。狐あ羨けなりぐなて羨ぐなて涎流しながら見っただけど。ほうして、あんま
り羨おんだはげあえ、獺あどさ、

「獺さん獺さん、めつぼう魚捕り上手じょんだおんだ。なんずんすつどほんげあえ捕る
えおんだが、おれあどさ教おへろちやや」

て言ゆたど。ほんで獺あ、丁度え、今度こそ仇とて呉くんねあんねあ、ど思もたども、
知らねあ振りして、

「お前なのほんげあえ立派だ尾おつばもてで、なによりじょうさねあべや。うんと冷
えつづぎ、川さ氷張すがんべ。ほうゆうづぎ、川の氷さ穴あげで、ほの穴さ尾おつばつこで
やて、待ちでつど、ほれこそ、すまがらねあ程、食いたでらんねあ程かがつさげあえ、
冷つみであえな我慢して待ちででみる。ほへば、ほの尾だおの、おれあなよりえつぺあ
かがるんだはげあえ」

て教おへだど。ほしたば狐あ、んだがんだがて喜よろこでいたけど。

ほのうづ、川さ氷^{すが}はて、うんと冷える日あつたけど。ほうすつど狐あ、ほこほこて喜で、川さ行^えて、氷さ穴あげで、尾^{おつぱ}っこで待ちつたど。だんだん尾凍^{しみ}できで、冷^{つみ}であえも冷でし、尾しめづげらつで、痛^{いで}あえも痛あえども、これだば、なんぼがかがるんだがど思^もて、我慢して待ちつたど。ほうして、待ちでるうづん、夜ああげそんなてきたけど。ほんで、少す尾引張てみたど。ほしたば、尾氷^{しみ}づでしまたおんだはげあえ、拔^もげでこねあべ。んだおんだはげあえ、狐あ、しつたでらんねあくれあかがたど思^もて、喜でいだけど。

ほうしているうづん、夜ああげできたけどは。ほんで今^{こんだ}度えがべど思^もて、ありつたけ引張たど。ほんでも引張りあげらんねあけど。ほんで、狐あ、獺^{しつた}さんが、引張でらんねくれあかがるて言^ゆたな、このごんだべど思^もて、喜で、

へええちや ええちや

獺^{しつた}さんが よいことおっしゃった

大骨あ 拔^もげるよだ

スココのコスココ

て言^ゆったけど。ほうすつど、村の人達^{したづ}あ、なえだて川の方で朝まがら狐あめつ
ぼう叫^さがぶおんだ、て聞^きっただけど。ほしたば、狐あまだ、

へええちや ええちや

獺^おさんが よいことおっしゃった

大骨^{おほほね}あ 抜^ひげるよだ

スココのコスコ

て叫^こがぶけど。ほんで、村の人達^{したづ}あ、川の方^えさ行^いてみだば、川き尾入^しつでやて凍^{しみ}
づがつでしまて、人^{ひと}あ行^いたおんだはげあえ、逃^ねげるかんじよししたども、逃^にげんねあ
で、すたばたていだけど。ほうすつど、村の人達^{したづ}あ、棒^{ぼう}もてきて、狐^{きつ}あどご叩^{たた}
ぎ殺^{ころ}してしまたけどは。

狐^{きつ}あ、獺^おに仇^{あだ}とらっただわけよな。んだはげあえ、ずほこえだり、人^{ひと}んどご騙^{だま}
たりさんねあなよな。

とんぴん からんこあ ねあっけどは。

(集成三「川獺と狐」)

話者 高橋キク

13 狐のお礼

むがしあつたけど。

ずつとむかしなあ、及位のぞきになあ、杉之助ていう若おわがえのあいだけどやあ。村の人達あ、皆「杉、杉」ていうがったど。杉あ家あ貧乏であえつたおんだはげあえ、家の人達あ皆働がねあんねあがったど。ほんで、杉あ、父つあつあと母ががどさ難儀さへらんねあて、一生懸命なて、炭焼えであ、ほの炭背負しよて、院内なの、湯沢あたりまで売りん行えてあ、米買てきたり、魚買てきたりして、うんと働ぐがったど。ほうして、やさしくて、親孝行であえつたど。

ある時づぎ、杉あ、まだ炭背負しよて、院内さでも売てくつがど思もて、雄勝の峠越えで出がげだど。ほうして、峠越して、下りで行えたら、右の沢の方で、狐こあ、あわれだ声出して、うんと鳴ぐ声あすつずおん。杉あ、「なんだて、狐こあ、めつぼうあわれだ声出してなぐおんだ。なんづがしたおんだべが」ど思もて、むぞせあえぐなて、道端みちさ炭おろして、沢へあさ入あて行てみだど。ほしたば、狐こあ、畏おつちよさかが

て、腰がら下の方挟まつでしまて、なんずもせねあでは、泣あつたなだけど。杉あむぞせあがて、

「なんだや狐こ、お前あ、こんた毘さなのかがて、おつちよばがだなあ、毘さなのかがたら、ただ殺さつでしまうばんだべ。よしよし。今助けで呉えつさげあえな」

て、毘ひつpegして、助けでくつだけど。狐こあ、喜で、杉あどさ頭こすりづげで、後みいみい山さ行たけど。え杉も、「おれに見つけらつで、えがったな狐こ」ど思て、狐こあ見ねぐなるまで見つたど。

ほしてなあ、杉あ院内で炭売て、戻て来たど。ほうして、峠んどごまで来たば、道端みづばたの石さ腰掛けつた娘こあいだけど。あね杉あ、娘こあ傍まで行たば、娘こあ、

「杉さん、杉さん」

て、杉あどご止めだけど。杉あ、「なえだて知らね娘こあ、おれあどご呼ぶおんだ」ど思いながら、

「なんですべ」

て聞だど。ほしたら娘こあ、

「おれあ、この辺りにいる狐だども、今朝まだおれあ家の狐こあ助けでもらては、
ほんとん有難どござりあした」

て、丁寧んこごまたけど。ほうして、

「おらあ、お礼してあえども、なんにも持てねあはげあえ、おれあ、今、ええ馬
こんなる。んだはげあえ、ほれ売てきてくんねあが。ほれあおれのお礼ですさ
げあえな」

ていうど、娘こあ、くるくるつと三回まわたけど。ほしたば、ええ馬こんなて
化げだけど。

ほんで、杉あ、ほの馬こ引張て、湯沢さ行て、馬喰達さ見へだど。ほしたば、
馬喰達、

「これだばええ馬こだ」

どて、高ぐ買てくつだけど。ほんで、杉あ、えつぺあ金もらて、家さ帰えて
来たけど。ほうして、杉あ、父ど母どさほの金やて、喜ばへだけど。

ほうして、次の日、まだ杉あ炭売りん出がげだずおん。ほして峠越して行たば、

まだ、昨日きのなの娘こあいだけど。杉あびつくりして、

「えぐお前めあけて来たおんだな」

て言ゆたば、狐の娘こあ、

「うん、馬喰あおれどご馬屋さ入いつど、そんま逃ねげできたなだ」
ていうけど。ほうして、

「杉さん、今度だ、床の間の置き物おのんなつさげあえ、湯沢さもてえて売うてころ」

つけど。ほうして、まだ、くるくるつと、三回まわたば、立派おのだ雉の置き物おのんな
たけど。ほんで、杉あ、まだ、ほれ持もて、湯沢の金持の家さ行たど。ほうして、
ほの置き物、ほごの家の旦那めさ見へだど。ほうしたば、ほの旦那、ほれ見て、

「これあてあしたおんだ。すばらすおんだ。こんげあええ物あ、めったん見ら
んねあ。えぐおれあ家さ持てきた呉くつだ」

どて、しこであま高ぐ買てくつだけど。

杉あ喜よろこで、金でつつら貰て、ほれ背負て家さ帰けあえて来たけど。

ほうして、まだ、ほの金、父と母どさ、みなあ呉くつだけど。父も母もうんと喜

で、

「恩返^{けあえ}すなて、人せ^{しと}あも余^{あんま}りねあな、狐こあお札するなて、まだ、聞^きだごどあねあ。んでも、生きおんだおん、助けらつて、よつぽどありがであど思^{おも}たあだべ」て語りあつたけど。ほれがら杉あ、金持^{もち}んなて、楽^{らく}ん暮^くしたけど。

とんぴん からんこあ ねあつけどは。

（集成二三三「狐と博勞」）

話者 高橋良雄

14 狐 む が し

むがしあつたけど。

ずつとむがしなあ、中田^{ながだ}から金山さ越えで行く途中の山さ、とても利口だ狐あ

いであつたど。晩方しめあなのほご越えで行^えぐ人^{しと}あ、ほの狐に騙され騙されすつがったど。

ほんで、中田の若衆わがえしゅで氣の利きだな三人して、

「あの畜生ちきしよあ、何時でも人騙しあがて、だまておがんねあ、今度だあ、おらだ三人して騙くして呉くえんべや」

て、相談したけど。

ほうして、今度あ、油揚げなの買たり、酒なの買て、鎌かんまがら縄がら持て、山越え、山越え、どっこえどっこえど行たど。ほうして、

「婆んばなやあ、婆んばなやあ」

て叫さで行たど。ほうして、叫えがび叫えがび行たば、

「あーこわあえこわあえ、あーこわあえこわあえ」

て、婆んば、杖つばて来たけど。ほうすつど、三人あ、

「なえだてなあ、この山としよりこ年寄あえぐ越えで来たおんだ。まづ、なんぼがこわあえがつたべな。今いま、据かつどご刈か払はてきれんして呉くえつさげあえ、ほごさ少すこす休やすめ」

て、三人で、ほごんどこ刈か払はて、奇麗めんけいして、草敷しでくつで、そごさ据すこらへで、

「どうだや、お前達めあえた、おらだも一休しとみして、くたびれ治すこして少すこすやつがや」

て、一人あ言たら、

「んだんだ。ほれあえほれあえ。一休みして行くべ」

て、酒だし、酒の肴なの、油揚げなの出したど。

ほうしたばや、婆んば、鼻ひくひくどさへで、ちろちろつど、こつち見つけど。
眼で合図して、これあ間違ねあぐ狐あ化げだなに相違ねあていうごどんな
て、

「婆んば婆んば、お前どさ、めへずらがして飲でるよでんまぐねあ、肴なんにも
ねあ、この油揚げでも食いながら、一杯やれちやや」

て、杯つでしたら、婆んばにこにこて、

「んであ、折角ほう親切ん言てくえんなだば、一杯ごつつおなつが」

ていうおんだはげあえ、一杯つぎ二杯つぎつぐど、なんぼでも飲で、

「あー、んめあがつたんめあがつた。酔た酔た」

て、婆んばな、へーほであえ酔て、ぐでんぐでんなてしまたけどは。

ほんで、三人あ、

「おらも婆んばど飲で面白^{おもへ}がつた。んでも、まだ、此^{ここ}所さ少^{せう}す残^{のこ}つた。こればりあげで行^えぐべは」

て、婆んばどさ、みな飲まへだけど。ほんで、婆んばありつたけ酔てしまたけど。ほれで三人あ、こんだええぞ、ていうど、

「婆んば婆んば、であえぶおらもええ機嫌^{きげん}なたし、ここにあ酒もなぐなたはげあえ、こからだば中田^{なかつた}ちつけあえはげあえ、おらだ家^えさ行^えて、飲みなおすすんべや」
て言^ゆたば、婆んば、

「んだが。ほれもええな。んであつでえぞ」

つけど。ほんで、三人あ、これあえがつたど思^もて、

「んであ行^ゆぐべ。婆んばな立^たでや」

て言^ゆたば、婆んば、よろよろ立^たたども、ろくに歩^あげなぐなてしまたけど。三人あ喜^{よろこ}で、

「なんだ婆んば、ほんげあえ酔^よたながは」て言^ゆたれば、

「あー、酔^よた酔^よた。あーこわあえこわあえ」つけど。ほんで、

「婆んば歩ありげねあんだはげあえ、背しよ負えて行えぐべは」

て、持てきた縄しとりで、一人あ、婆んばどご背負えて村えさ行えたど。狐あ酔たおんだはげあえ、ないしたて重であけど。

ほうして、村さ着ぐど、

「婆んばな。ほら来たぞ」

て、家さ婆んばどご下ろして、ほら待遇たいぐするどて、まだ、酒飲まへで、ほの間こめんに狐がりだ、て村の人しとみな集あつべで、棒ぼうもてきて、

「此所ここの家の神棚しとの神さま、二人したりんなれ、ていうど二人ふにんなんども、ほれぐれあだば、婆んばだて出来けんべや」

て、狐あどご馬鹿ゆんして言ゆたど。ほしたは、

「見でろ。ほのくれあのごどだば雑作じようさねあ」

て、口くちごもごもさへんども、酔おっほてしまたおんだはげあえ、化げるにも化げんねあぐなてしまて、けあえては、尾出おっほしてよごしたけど。ほうすつど村の人達したつあ、みんなして、

「この狐あ馬鹿で化げんね。この狐あ馬鹿で化げんねあ」

て、囃し囃し、棒で突ぶぐやら、叩ぐやらして、馬鹿んしたど。狐あ、とうど
う正しょうたあえ体あらわして、逃ねげんべど思もたども、酔よてしまたおんだし、ほれさ、戸障
子あみな閉たてでしまたべし、ぐるりさ村の人達あいで、あっちゃ行えげば、あつつで、
こつちやくつど、こつつで叩がっで、走りまわたども弱よてしまて、とうどう、村
の人達に叩たたぎ殺ころさつでしまたけどは。村の人達あ、今度こんだあ、狐汁こして大さわぎし
て、さがもりだけど。とんぴん からんこあ ねあっけどは。

(集成二七八「狐の立聴」型) 話者 高橋タケヨ

15 狐 む が し

むがしあつたけど。

であえぶ昔の話だども、鏡沢きやざわの荒沢あらさに、佐平さへいていう狐あいで、始終じよんであえ、人化しとが

すつがったど。荒沢にあ岩魚いわないるおんだはげあえ、人ひとあえぐ釣り人行ぐがったど。
佐平狐あ、人あ、岩魚釣んな見で、おれも岩魚釣て食いであえおんだど思てい
でったど。

ほうして、なんずんしたら雑魚釣りあどから釣り竿とるえべと思て、大変へえずあえか
んげあえで、熊んなて、がさがさと出はて来て、どでさへてみんなどなたど。

ほうして、待ちつたば雑魚釣りあ来たけど。ほうして、ほの人あ、釣り始づめつ
どそんま、佐平あ、熊んなて、藪やらがさがさがして出はて行たど。ほうすつ
ど、雑魚釣りあおかねあがて、どでして、釣り竿なのぶつとばして逃げねで行てし
またけどは。佐平あ、ほの釣り竿たがて、雑魚釣りの真似しとしたけど。ほれがら
ずおのあ、佐平あ、雑魚釣りあ来つど、熊んなて、人ひとんどごおどしてあ、釣り竿
とんなであえつたど。

ほれがら、ほの頃ころ、小荒沢こあらさにあ、おしんこ、ていう狐あいであえつたど。これあ
まだ、何時いづでも、子供わらわんなて出はて来て、通る人ひとんどから、

「腹へたはげあえ、何がけろ」

て食うおの貰らてる狐であえつたど。

ほれがら、やっぱりの頃、田代の小田代に、おもよ、ていう狐あいで、葬式だどが、法事^ずん時^{づき}あ、和尚さん呼ばつて来んべ、ほうすつど途中で和尚さんどこ騙して、袈裟衣みなとりあげで、和尚さんなて行て、ごつつお食てくんなであえつたど。

ほれがら、ほの当時^{とうづ}、旧村の上の山^{ゆねやま}に、びっこ狐あいで、木の葉でも、石ころでも拾ろてきて、ほれ銭^{じえね}んして、店^{めへ}さ行てあ、油揚だどが、魚なの買て来んなであえつたど。

ほれがら、赤沢^ざの、お定ていう狐あいで、六左衛門^{ろくざえむ}んどごのお墓んどさ出はてきて、晩方しめあえだどが、夜んま、人あ通つど、ええ姉こんなて出はてきて、人騙して、酒飲めどて、泥水飲まへだり、魚だどて、ほのあだりの胡瓜かへだり、湯^{へあ}さ入れどて、水たまりこさ入^{へあ}らへだりして、ほの人あ持てきた食いおのとてしまうなだけど。

ほうしてなあ、お定あ、矢島の殿様、お江戸^えさ行^{づき}く時、何時^{いつつ}も落合^{おじやだぎ}滝の旅簞さ

泊んな見でつがったど。旅籠であ、ほの殿様くつど、えつぺあごつつおすんなであえったど。ほんで、お定狐あ、何時も、おらもあんげあえごつつお食いであえおんだなあ、ど思て見でつがったど。

ある時、お定あ、小田代のおもよ狐ど行き会たけど。ほしたば、おもよあ、「お定さんや、何がんめあえごどあねあおんだがや。おれも和尚さんに化げんな、村の人に覺らつでは、近頃あさつぱりんめえおの食んねあぐなてしまたは」
というけど。ほうすつど、お定狐あ、

「あるある。一人ばりであ駄目だども、十人ぐれあえ居つど面白ごどあでげんどもなあ」

つけど。おもよあ、

「荒沢にあ、佐平あ居んべし、小荒沢にあ、おしんこあ居んべし、上の山にあびつこ狐あ居んべし、ほれぐれあえだば直ぐ集ばんべや」

ていうごどんなたど。

荒沢の佐平狐ど、小荒沢のおしんこ狐、上の山のびつこ狐あどき、呼出し状か

げだど。ほうすつど、ほれさおもよ狐に、お定狐あ入て、五匹あ集ばたずおん。

ほんで集ばたどごでお定狐あ、

「実あなあ、落合滝の旅籠さ、矢島の殿様泊つど、旅籠であ、何時でも大いした
ごつとお出すはげあえ、みんなして、矢島の殿様ど家来んなて、ごつとお食いん行
たら面白べど思ふなよ。なんとおんだべ」

て話したど。ほうしたば、みんな、

「ほれあえ、ほれあえ」

ていうごどで、佐平あ殿様んなて、あどの人あ家来んなて、足んねあどごあ、
かがどが子供達どご連でえぐべ、て相談あ決またけど。ほしたば、佐平あ、びつ
こ狐あどご、ずろつと見て、

「矢島の家来にびつこだな居だがや」

て聞ぐけど。ほんでお定あ、

「びつこだななの居ねあな」

て言たば、佐平あ、

「んであ、上の山のびっこどごなの連で行がんねあべや」

て言^ゆたど。ほしたば、おしんこ狐も、

「びっこど連^っでえて、分^{わか}らえつど、なんにもならねあべや」

つけど。ほんで、みんな、この度^{たび}だけは上の山のびっこどごばぬがすべ、どなたど。

さあ。ほうすつど、今度あ、びっこ狐あ面白^{おもへ}ぐねあずおん。ほんで、びっこ狐あ、ぶんぷんて怒^{こしえ}で、びっこひぎひぎ上の山さ行てしまたけどは。

ほうして、次の日、朴木沢^{ほぎざやま}山の旧道さ、赤沢^{あかさ}のお定、荒沢の佐平、小荒沢のおしんこ、小田代のおもよ、ほうして、あどあ足^たんねどごあ、かがなの子供^{わらすたづ}達なの十二、三匹ばり集ばたけど。ほうして、みんな侍^{さむれあ}んなて、萱^ほ刀^ほんして、朴^ほの葉頭^はさのへだば、立派だ陣笠^{じんがし}んなたじゅおん。ほうして、供^{とも}そろえて、佐平あすつかり殿^{との}様^{やま}んなて、すかさかど来^きたじゅおん。

上の山^{やま}のびっこ狐あ、おわばり仲間^{なかつ}がらはづさつだおんだはげあえ、面白^{おもへ}ぐねあくて、面白^{おもへ}ぐねあくて、野郎^{やろう}達^だどさなんとがしとあわふがへねあんねあ、ど思^{おも}て

いだおんだはげあえ、次の朝ま、こつ早^{ばや}ぐ、落合^{おじや}滝の旅籠^えさ行て、旅籠の旦那どさ、
「今日、狐達^だあ十匹^だばり、矢島の殿様ど家来^こん化^こげで、ごつつお食^くであくて、此所^{ここ}
さ来^こつさげあえ、騙^{だま}さえんなよ」

て教^{しやう}へだど。

さあ、今度^{こんど}あ、旅籠の旦那^{だんな}あ大^{おほ}変^{へん}だど思^{おも}て、村^{むら}の人集^{ひとあひ}べで、なんとごどしたら
えがべて相談^{さうだん}したど。ほしたば、

「んであ、まづ、村^{むら}にいるだけの犬集^{いぬあひ}べで、ほれか^くぐしておえで、狐^こだ室^{むろ}さ入^いた
ら、戸障^{こま}子^こびつちり閉^くぢで、出^ではらんねあ^あぐしておえで、なんば燻^{えぶ}すかげで、騒^{さわ}
ぎ出^でしたら、犬入^{いぬいり}てやて嚙^かまへんべ」

て言^いたど。旅籠^{りやう}の旦那^{だんな}も、

「ほれあえ。んであ、狐^こだ来^きたら、みんなおれあえのあだり、ぐるつと取巻^{とりめあ}で、家^え
ん中^{なかつ}がら逃^にげで来^きたら、棒^{ぼう}だりなんだりで、ただぎ殺^{ころ}してしまえ」

て、相談^{さうだん}でげで、犬集^{いぬあひ}べで待^{まち}つたど。

狐^こだほんたごど知^しらねあべ、今日^{けふ}あ、落合^{おしや}滝^{たき}の旅籠^{りやう}で、ごつつお食^くうえずおん

で、皆喜^{よろこ}で、朴木沢山^{ほきざ}がら来たずおん。

ほうして、旅籠さ着^きだば、旅籠の旦那、愛相^{えあそ}えぐ、皆どご室さ通したけど。ほうして、「前金もらいあす」て言^ゆたば、お定狐^{えいこ}あ、「んだが」て、小判一枚出したけど。旦那あ、ほれもらうど、水屋^{みじや}のかまどの火さくべてみだど。ほしたば燻^{えぶ}きて、木の葉んなたけど。旦那あ、ほれ見^みで、これあたしかに狐だてわがたけど。狐だ、ごっつお、今出^{いま}はてくつが、今出^{いま}はてくつがど思^{おも}て、待つ^{まち}つだども、ほのごっつおずあ、ながなが出^ではてこねあずおん。ほんで、家来^{えき}んなたな、

「まづ、酒^{さけ}ど肴^{さけ}出してくれ」

て言^ゆたば、旅籠の旦那あ、

「はえはえ。今出^{いま}しあすさげあえ、も少^{すこ}す待つ^{まち}で下^{くだ}せあえ」

て言^ゆておえで、村の人達^{むら}さなんば持^もてこらへで、井^いさ燻^{おき}入^いつで、ほの上^{うへ}さなんばでつ^つつら置^ええで、なんば燻^{えぶ}す三^{さん}つも四^しつも作^{しやえ}で、狐^こだいだ室^{むろ}さ入^いつでやて、戸^とていう戸^としめ^{すこ}で、つ^つつぱりかてしまたど。

ほうして、少^{すこ}すすつど、狐^こあだ、咳^{へげ}するんだが、涙^{なみだ}出るんだが、苦^くぐなてき

たおんだはげあえ、早く戸開げろどて叫がぶけど。旦那知らねふりして、戸の陰かんげで聞っただど。ほしたば、狐だ苦がて、こんだ本性あらわして、きやんきやんで鳴ぎ出したけど。

ほうすつど、旦那あ、今だていうど、室さ大十匹へばり入でやたずおん。ほうしたば、ほれ、室中わんわん、きやんきやんで、おっかねあおんだけど。ほうして戸さぶつかで、ばつんばつんで、まづまづ大騒ぎだけど。ながにあ、高窓がらとび出してくんなもいだけど。ほうすつど、村の人達あ待づつだべ、棒でありつたげただがつで、殺さつでしまふべし、室の中であ、犬にかじらつで死ぬべしで、ほのうづん音おとあしなぐなてしまたけどは。ほんで、戸開げで見だば、狐だみな犬に食つ殺さつで死でだけどは。

ほんで、村の人達したうあ、これあたいたおんだ、えぐなし畜生だ、ざんまみろ、今度こんだあ騙さえつごどあねあは、どて大喜びだけど。ほうして、村中の人達あ、狐汁で酒もり始ずめだけど。とんびん からんこあ ねあっけどは。

16 狐　む　が　し

むがしあつたけど。

むがしなあ、旧村の大森に、とても賢^{かすこ}え狐あいであえつたど。其頃^{ほのころ}あ、えぐ狐に騙^{だま}さつた話ああつたおんだど。

ほら、鏡沢^さだ田代^さだ大滝^さだて、旧村の人達あ、方々^{つぎ}さ親戚ああんべ、ほの親戚^{つぎおの}で、祝事^{ゆわごと}だどが、仏事^{つぎ}ん時、酒あ付物^{つぎおの}だべ、今^{いま}だてんだじゆんだ。ほの帰^けえりにあ、お包みああんべ。ほんで、酔^よて、お包み下げでくつどぎあ、

「大森^おにあ、かしこあいだはげあえ、晩方^あしめあえなのあんまり酔^よてくんなよ。お父^おさん^あ」て言^ゆて、おやじ達^ああどご出してやるおんであえつたど。

ほの頃、鏡沢に、甚助^{つぎ}ていう百姓親父あいであえつたど。ほの甚助あ、ある時^{とき}かがのきぬえあ実家で、御祝儀ああるていうなで、落合^お滝^あさ招^よばつて行^えてつたど。ほうして、ごつつおなて、お包み貰^けらて、夜んま帰^あえて来^きたど。んでも、甚助あ、酒あんまり飲^のめぬえおんだはげあえ、ほろつとしたくれあで、あんまり酔^よわねあ

がったど。ほうして、旧村通て大森んどさ来た時、「ああ、んだ。ここあ大森んどごだ。此所にあかしこあいだ筈だ。今日あ、お包みさ魚入ったはげあえ、騙さんねよんしねあんねあ」ど思て、歩りて行たど。んでも、大森のあだりであ、誰ども行ぎ合わねあがったど。

ほんで、これあえあんべあだ、ど思て行たど。ほうして、あどあ、鏡沢の灯りあめできたし、大丈夫だべど思て、荒沢の橋んどごまで行たど。ほうしたば、提灯下げだ娘こあ、一人いだけど。ほんで、甚助あ、まだ見だごとあねあ娘こなんだし、「こんた夜んまんなてがら、こんたどごさ知らねあ娘こあいだじゅ」ど思て、これごそ大森のかしこだべど思て行たど。ほうして、甚助あ、娘こあ側まで行たば、娘こあ、

「甚助さん。今帰えりおすか。おれあ家のお父さん、用あつさげあえ、一寸寄てころつけぜあえ」

て言うけど。ほんで、甚助あ、
「お前家のお父さんて誰だや」

て聞だば、「荒沢のつあつあよ」つけど。ほんで、甚助あ、荒沢の家えにあ、こげあえ
た娘こあいねあ筈はんだどもて、

「荒沢の家にあ、お前めあみであんた娘こあいねあ筈はんだ。おれあ知らねあなあ」
て言ゆたべ。ほしたば娘こあ、

「なえだて、おれあどご知らねあなて、おがしごどいうおんだ。えぐ見だらえべ
や。おれあさだえだであ」

ていうけど。ほんで甚助あ、

「さだえなて、おれあ知らねあなあ、お前んつあ、これ欲しなだべ」

て、お包み、娘こあ鼻先つき突出したば、娘こあ、手出しそなたけど。ええ匂におえあ
したんだおん。すつど甚助あ、

「お前んつあ、大森のかしこだべ。お前んつあ、このお包み食くであくて、おれあどご騙うすろす
かんじよであえつたべな。ほれ、これよ」

て、まだ、ほのお包み娘こあ鼻先つき突出して、ぶらぶらさへだば、鼻ひくひく
さへで、まだ手出しそなたけど。んでも、今度あすこす後うすろひこみしたけど。甚

助あ、わんざどお包み、まだ鼻先さ突出して、

「これ欲しなだべであ。これこれ」

て、ぶらぶらどさへだば、鼻ひくひくさへで、後さひこで行て、丁度橋の真中頃までひこだけど。ほの橋あ、細え橋なおんだはげあえ、甚助あ、こん時だていうど、娘こどご、どえらおつけで、沢さ落どしてしまたけどは。

ほん時あ、前の日であえぶ雨あ降たおんだはげあえ、沢の水あえつぺあ出つたあであえつたど。んだはげあえ、沢さ落どさつたかしかあ、流さつてえてしまたけどは。甚助あ、

「畜生あ、ええごどした。何時も何時も人騙しあがて、罰ああだたんだ」
て、家さ行たけど。

かしこあ、沢さ流さつて、もう少すで大つき川さ出はつどこて、柳の枝さたぐづで漸ぐあがてきて助かたけど。ほうして、

「甚助、あの野郎あ、憎え野郎だ。みでろ。何時が仇とてくえつさげあえ」
て、づぶ濡れんなて、大森の方さ行くけど。

ほれがら十日ばりあど、十三郎じゅうざぶろの馬こあ、病気で死だけど。ほんで、皆してほの馬こ埋めだど。ほうして、ほの馬こ埋めでがら、ほごらあたりき、毎晩狐あ来てなぐおどあすつけど。ほんで、次の日見つど、土掘つちやくた跡あとああんなだけど。んだて、狐なの掘てみだて、馬こまで掘れねあでいだけど。

ほうしているうづ、ある時つぎ、晩方暗くなたら雨こあ降てきたけど。甚助あかがのきぬえあ、

「あらつ、雨こあ降てきたちやは。洗濯物乾しつた筈だ」へんたぐおの　はん

ていうなで、裏さ洗濯物とりんえて、洗濯竿がらとりがだしつたば、

「お晩ですは、きぬえさん、荒沢の父急病つあつあだはげあえ、おれど一緒えっしょえ直ぐ来てころど」

て、提灯下げだ男人おんどいしとあいうけど。ほんできぬえあ、どでして、

「なになおんだべ。昨日まで働はたれあつだけあ、あだたどごだべが、まずまずたまげだちや。んであ直ぐ行きあす」

ていうど、洗濯物なのおそこそ入へつて、ほの男人どさつでえだど。

ほうして、であぶえ大分行たば、道端さ、三寸ばりの太さの丸太ささてで、道さ横な
ていだけど。ほしたば、ほの男人あ、

「なんだて、こんたどさ丸太なのささて、邪魔だごと」

て、引張ひばてだけど。ほんでも、抜けねあくて通らんねあおんだはげあえ、

「きぬえさん、きぬえさん。この丸太邪魔で通らんねあはげあえ、悪りども、一寸
手伝しつとえあだてくんねあが」

ていうけど。ほんで、きぬえあほの丸太さたぐづえで、一生懸命引張けめりがだ手
伝だたど。ほうして、ようやくほれよへだけど。

ほしたば、ほの男の人あ、

「きぬえさん、どうもありがど」

ていうけど。ほしたば、提灯あがりの灯あ、急になぐなてしまて、真暗まくらなたけどは。

きぬえあ、藪やぶん中にいで、雨でたらくされ濡ぬつでだあだけど。ほんで、漸く目あ
さめだみであえんなて、

「あら、おれあ狐に騙だまさつだあだ」

て、わがて、藪こえで、よやつと家さ歸えたけど。

ほうして次の日、村の人あ見だば、馬こあ、足じやんと立でで、肉あみな食つ
でしまて、骨ばりなてだけどは。んだはげあえ、甚助あ、「かしこに仇とらつたあ
だべ」て言つたけど。とんぴんからんこあ　ねあつけどは。

話者　高橋初吉

17　大森のかしこ

むがしあつたけど。

むがしなあ、旧村の大森に、かしこていうとでも利口だ狐あいであえつたど。

ほの狐に、村の人達あ時々騙さつていつがつたど。祝事やなにがでごつつおな
て、お包みもらて、夜んま酔っぱらてくつど、大森のかしこあ、ええ娘こんなて
出はてきて、騙してお包みなとりあげたり、騙さつて、杉林さしと晩寝へらつた

り、んだがと思うど、湯さ入れて言わつで、裸んさつで、田の水口さ入らつたり、さまさまであえつたど。

ほんで、子供達あ泣だり、夜んま、何時までも寝ねあがつたりすつど、「この野郎あ、何時まで泣でんなだ。ほんげあ泣でつど、ほれ、大森のかしこあ来るんだはげあえな」どが、「ほら、早く寝ろは、寝ねあど大森のかしこあ来んぞ」なて、子供達おどすど、恐がつていうごど効ぐおんであえつたど。

ほのころ、旧村に太郎吉ていう百姓あいであえつたど。太郎吉ずあ、小百姓で炭焼えあだりしている人で、とても利口だ人であえつたど。

ある時、太郎吉あ、鏡沢の親戚で、結婚式あつたおんだはげあえ、晩方しめん招つで行たど。ほうして、酒好ぎだおんだし、ほれさ結婚式だべ、んだおんださげあえ、ほれあ飲め、ほれあ飲めて飲まへらつで、でぐんでぐん酔っぱらて、お包みのごつとお持だへらつで、提灯下げで、よろらよろらど帰えてきたど。

ほうして、大森んどごまで来たば、おわあ家のかがあ迎げんきたけど。ほして、「お父さん、お父さん、なんぼが酔て来んべど思て迎げん来たは」

つけど。太郎吉あ、ほつとして、

「んだが、んだが」て言^ゆたば、かがあ、

「お包みなの此方^{こつちや}よごへは。おれあ持てえて呉^くえっさげあえは」

ていうおんだはげあえ、太郎吉あ背負てだお包み、かがどさ渡して、鼻唄^{うた}がけで来たど。ほうして、一寸^{しつとえあ}来たば、自分^{おわえ}の家^えだけどは。ほうして、家^{へあ}さ入ったばかがあ、

「つあつあ、湯^{へあ}さ入て、酔^あいさますんだ」

つけど。ほんで、太郎吉あ、裸^{へあ}なて、湯^あさ入たど。ええ案配^{あんべあえ}だ湯^あだおんだはげあえ、太郎吉あ、ええ氣持^{あけ}んなて、湯^あさ入たまま寝^{あけ}でまたけどは。明^{あけ}がだんなて、なんだが少^さす寒^{さみ}ど思^もたば、くしやみして目^あさましたけど。ほうして、目^あさめでみだば、田^あのかしらの淀^あみこんどさ入ていだあだけど。ほうして、着^き物^{おの}あ田の畔^あんどさあんども、お包みなのすてつとなぐなていだあだけどは。

太郎吉あ「あつ、おれあ夕^{ゆべな}、大森^あのかしこに騙^あさつだあだな。」て、感^あづえだど。ほんで太郎吉あ、くやしくてくやしくて、「ようし、畜生^ああ、おれあどご騙^あし

あがて、みでろ、必ず仇とてくえっさげあえ」て、家さ行たけど。

ほうしてなあ、何日^{えつか}がたてがら、少す小雨この降る暗あ晩、太郎吉あ、かがどさ油揚げ二十枚ばりあげらへで、あげだでの匂えのふん^つふんすんな、栃の葉さ包で、ほれ下げで、鏡沢の方さ、酔っぱらたふりして、笠かふて、みの着て、ふらふら、ふららど、あっちや据り^{ねま}、こっちや据りして行たど。ほうして、大森少す過ぎだあたりまで行たば、めんごげだ娘^{あね}こあ出はて来たけど。太郎吉あ、「来たな」と思たども、騙さつだふりしてんべど思て、知らねあふりして、よろらあよろらあど、油揚げ下げで行たど。ほしたら、ほの娘こあ側さ来て、

「太郎吉つあん、太郎吉つあん。おれあ家^えのつあつあ、炭焼ぎの勘定祝^{ゆわえ}だはげあえ、つでこえ、ていうはげあえ迎げあん来あした」

て、提灯めへで、

「お前家^{めあええ}まで行がねあんねあど思たども、まず、ええどごで行き会^あてえがつた。まず、おれあ家さ行てころ」

て、太郎吉あ手ひつぱつけど。太郎吉あ、これあ丁度ええ案配^{あんべあえ}だどもて、娘^{あね}こあ

手しめでついで行たど。

ほうしたば、やつぱり大森さ上がて行ぐずおん。んだはげあえ太郎吉あ、これあやつぱり大森のかしこに相違ねあど思たはげあえ、娘こあ手離さねあで、油揚げもとらんねあよんしめで行たど。

ほうしたば、立派だ家さ来たけど。ほうして、まず入れどていうおんだはげあえ、娘こあ手堅く握て、酔っぱらたふりして、わらじなの脱がねあで上がたど。ほしたら、囲炉裏んどき、五、六人いで、酒飲でだけど。太郎吉あ入てえだば、

「やあ、太郎吉つつあんが、えぐ来てくつだ、まず、飲め」
どて、盃突出したけど。んでも太郎吉あ、

「まず待で、おれあ揚げだでの油揚げ持て来たはげあえ、まず、これ味みでころ」
て、油揚げ出したずおん。ほうすつど狐だべ。みんな、

「これあんめあ、これあんめあ」

て、太郎吉つあ、酒注ぐな忘つて、夢中んなて食てだけど。ほの油揚げつあ、酒粕さ焼酎でつつら入つて混たな中さ入つた油揚げであえつだど。んだおんだは

げあえ、忽ち酔っぱらてしまて、本性出して、狐の姿まる出しんして、囲炉裏端さごろごろと寝でしまたけどは。

ほれみつど、娘こあ、逃げんべど思たども、太郎吉あぎつつぐしめつだおんだおん、なんずして逃げらえるおんでねあんだはげあえ。太郎吉あ、しめつだ狐の手、えつくん見たら、尾おっぽだけど。大森のかしこあ、尾しめらつで、なんずしても逃げらんねあべ。んだおんだはげあえ、どうが許してころどて、涙ぼろぼろどこぼして泣ぐけど。太郎吉あ、むぞせあえぐなて、

「お前めあ、今いままで、何人も人騙しとして、悪わりごどしてきたはげあえ、本当だばみなぶつ殺してくえんなだ。んでも、生き物おんだおん、むぞせあえどごもある。んだはげあえ、今日あ許してやる。ほれかわり、これがら、人騙したり、鶏とたり、悪りごどあこれがらしねあていうごどだ。もし、ほういう悪りごど一匹でもしたら、村中の人達集べで、お前だ巢掘つくりげあえして、子つこがらみ、皆殺しんしてしまう。ええが、みんなさえぐ聞がへでおげ」

て言ゆたら、大森のかしこあ、

「今度^{こんだ}から決して悪^{わる}りごどあしあへんさげあ、どうが許^{ゆる}してころは」

て、皆^{みな}さも、えぐ言^いて、さへねはげあえ、て手^てつであやまたど。太郎吉も、「ん
であ今度^{こんだ}からすんなよ」て、許^{ゆる}してやたけど。

ほうして、ほれがらずおのあ、大森のあだり、夜中魚や油揚げ持^もて歩^{あり}だて、騙^{あや}
さえる人^{ひと}あいなぐなたけどは。とんびん からんこあ ねあつけどは。

（集成二九七「坊様と狐」話者 高橋良雄

18 安部の保名

むがしあつたけど。

むがしある所^{ところ}さ、殿さまいだけど。ほの殿さまの奥方、病氣^{びやうき}んなて、なんぼ医
者^{しや}さかけだて治^いらねあけど。ほんで、殿さま、道庵^{だうあん}という八卦おぎん、八卦おえ
でもらたど。ほの道庵^{だうあん}という八卦おぎあ、八卦おがへつど、日本一という程じよ

んだ八卦おぎであえつたど。

ほの道庵、殿さまの奥方んどご見で、八卦おえだけど。ほしたば、ほの病氣あ
狐の生肝とて飲まへつど治るて出だけど。ほんで道庵あ殿さまさ、

「殿さま。奥方さまの病氣あ、狐の生肝飲まへろ、ど出あした。んだはげあえ、
狐捕てきて、ほの生肝飲まへでけらっしえ。ほうすつど直ぐえぐなりあす」

て言たど。ほんで、殿さまあ家来達さ言い付けで、狐狩りさへるごどんしたど。

ほんで家来達あ、えつぺあ山さ行て、狐狩りしたど。ほうしたば、狩り出さつ
で、一匹の狐あ出はてきて、逃げだけど。ほんで家来達あ、

「ほらつ、狐あ出はたぞ、逃がすな、逃がすな」

て叫がびながら追たど。ほうしたば狐あ、あつつこつ追わつで、しめあえにあ、
逃げ所あねあぐなて、お観音さまのお堂の中さ、ひよろひよると入て行たけど。

ほのお観音さまにあ、安部の保名ていう若あえ人で、ながなが利口でしつかり
した人あ、体悪くして、三、七あ二十一日の間こもて、お観音さまさ、体治して
ころて願かけでいだあだけど。ほごさ、狐あ弱わて、ひよろひよると入て行たば、

保名いだべ。んだおんださげあえ、狐あ、涙ぼろぼろどこぼしながら、保名どき、
「保名さん、保名さん。今おれあ殿さまの家来だづに追わつで、捕めらえつどご
だはげあえ、どうがおれあどこかぐして、助けでころ」

て頼だけど。ほんで、保名あ、窮鳥も懷さ入れば助けるていう例えもある、
ど思て、まだ、まして生おんだおん、ただ殺さへでいらんねあ、ていうなで、香
炉さ入てろて、香炉さ入で、おわ知らねあふりして、お観音さま拝んだけど。

ほうしたば、ほのうづん、

「ほら、狐あお宮さ逃げだぞ。ほら捕めろ」

ていう声あしたどおもたら、忽ちどやどや家来達あ来たけど。ほうして、保
名いだおんださげあえ、

「今、ここさ狐あ来たけべ。何処隠つたが教ろ」

つけど。保名あ、

「ほうゆう者あ、来ねあがつたな」

て言たば、

「いや、たしかに来たあだ」

「いや、来ねあがった」

「来ねあじゅあねあ。たしかに来たあだ。隠したて駄目だ」

「なんと言わつだて、来ねあ者あ、来ねあていうはんてねあ」

「きた」「いねあ」

ていうごどんなて、家来達あ、

「殿さまの奥方さま病気で、狐の生肝とて飲まへつと治るていうごで、我々はわざわざ狐狩りして、此所まで狐あどご追てきたあだ。それを来ねあなて、強情つばて隠すごつたら、ただであおがねあぞ」

て、おどすけど。ほんでも保名あ、

「いや、なんといわつでも、来ねあけはげあえ、来ねあ、ていうばりだ」

て、あぐまで隠したど。ほうしたば、ごしえで、

「げんに入つどこ見つだな、強情奴だ。それ、痛めづげで白状さへろ」

ていうど、こんだ、保名どごさんさん叩きづけだけど。ほんでも保名白状しねあ

おんだはげあえ、

「こいづあ、随分強情奴だ。向うの滝の上さ連で行て、あそこの崖さ逆ん吊しておげ、明日まで吊しておげば、鼻がら血あ出んべし、眼さも血あ溜て、盲んなるし、余り動ぐど、縄切つて崖がら落で死ぬばんだはげあえ、白状するまで吊しておげ」

ていうど。保名どご、後手^{うすろで}縛^すばて連で行たど。

ほうして、保名あ滝^{ゆえ}の上の方さ連で行がっただけどは。ほうして途中まで行たば、向うがら、和尚さん来たけど。ほうして、ほの人達ど会うど、

「これはどうした罪人なんです」

て聞くけど。ほんで、家来達あ、

「殿さまの命令で、我々あ狐狩りしたば、狐あほごのお宮^{へあ}さ入たけはげあえ、行たば、この男あいで、狐隠して、狐なの来ねあけどて、強情^{ひのづ}つっぱるおんだはげあえ、ほごの滝の上の崖さ吊して、白状さへんべど思て連で来たあだ」
て言^ゆたど。ほうすつど、和尚さんあ、

「それあなる程悪^わりがもしんねあども、たがが一匹の狐のために、この若^{わが}者^{あえお}が命おどすがもしんねあよだごどは良^よくねあ事だ。この若^{わが}者^{あえお}はおれああずがる」

ていうど、保名どさ、ばえつと、おわあ衣掛^{いかけ}げだけど。なんと罪人だて、和尚に衣掛^{いかけ}げらえつど、なんずも出来^{でき}ねああだだけど。んだおんだはげあえ、家来達^{けらいたち}あ、保名どご和尚さんさ預^よげで、行^いてしまたけどは。

ほの和尚ずあ、さぎだ助^{すけ}けらつた狐で、保名連^つでえがれつど直^ちぐ香炉^{かうろ}がら出^ではて、先廻^{まわ}りして和尚ん化^けげで、保名どご助^{すけ}けでくつたあだだけど。保名あ、和尚さんに縄^{なわ}とえでもらたども、さんざん叩^{たた}がつたおんだはげあえ、体中^い痛^{いた}であえて、よろぼて歩^{あり}ぐなだけど。和尚さんほれ見^みで、

「この道^{みち}少^すす行^いぐど、泉^{いずみ}ああつさげあえ、其^そ処^こで水でも飲^ので、体休^{てい}めで、ほれがらほの道^{みち}ずつと行^いつてみる。ほうすつど、家^えああつさげあえ、ほの家^{いへ}んどさ行^いてみる」

つけど。ほんで保名あ、和尚さんどさ礼^{れい}言^{げん}で、ほの道^{みち}行^いたど。ほしたばやつぱり泉^{いずみ}あつけど。保名あ、ほごで水飲^ので、ゆつくり休^{やす}で、まだ行^いつたど。ほうした

ば向うに家あ一軒めつけど。ほんで、ほつつの方さ行たば娘こあ、此方来つけど。
ほうして、ほの娘こあ、保名の側まで来つど、だんまで保名どご見っただけど。ほ
して、

「どごが体でもえぐねああですか。すっかり弱て、歩ぐなようやぐだよですども」
て聞ぐけど。ほんで保名あ、

「んだ。狐助けつどて隠したば、殿さまの家来に叩がつて、体中痛であえて、
なんずしたらえんだがわがらねあえあだ」

て教だど。ほしたば、ほの娘こあ、

「ほれあ、ひでーめん会いあしたなあ、見れば歩ぐなもようですおん。んであ、
おれあ家さきてころ。おれあ家にあ誰もいねあし、ゆつくり休で、体治さっしえ」
て、保名あ手ひっぱてくつて、おわ家さ連でえてくつただけど。

ほうして、ほの娘この家さ行たば、ながなが立派だ家で、娘こ一人で暮しつた
なだけど。保名あ、ほの娘この家で、休まへでもらて、さまさま薬つけでもらた
り、飲まへでもらて、親切ん看病してもらたけど。ほんでだんだん体も良くなて、

暫くすつど、すっかり良くなたけどは。すばらんでも、保名あ、娘こあ親切だべし、何日でも遠慮しねで、すぎ好なぐれあえいでけらつしえあて言うおんだはげあえ、おわ家さ帰る気んならねあけどは。けあえ

ほうして暮してるうづん、二人あ若者同志だべ、お互あえん好んなて、二人あ夫婦んなたけどは。ほうして、一年も暮してつど、いづねん娘こあ腹大つきぐなて、ほのうづん、子供生したけど。ほの子供あ男子供で、めんごげだ子供だけど。保名あ童子丸ど名前つけで、二人あめんごがて育でつだけど。保名と一緒んなた娘こあ、名前葛の葉ていうなだけど。

ほうして葛の葉あ、毎日、機織りして、ほれ町さ持て行て、え売て来てあ、食うおの買て来、保名の好きだおの買て来て、何不自由なく暮しつたけど。ほうして葛の葉あ、童子丸あどさ乳こ飲まへであ機織りし、えあだ葛の葉機織てる間、保名あ、子守りして暮してるうづん、早えおんで、五年たたけどは。ほんで、童子丸あ四つんなたけど。ほんでも童子丸あ、まだ乳こ飲でんなだけど。

ほうして、ある時、つぎ童子丸あ、乳こ飲みであえぐなて、機屋さ行たど。えほした

ば機織る音あしねあけど。ほんで、童子丸あ、お母さんいねあだがど思て、そつと戸開けでみだど。ほうしたば、大つき狐あ、板の間さごろつとなんがくなくて寝つだあだけど。童子丸あどでして、

「お父^{どつ}つあん、狐あいだ！おかね」

て、大つき声出して叫^さがで、走してきて、保名どさ抱ぎづだけど。保名あ、

「なえだや童子丸。機屋に狐なのいねあべぜ。お前何見できたおんだや」

て言^ゆたば、童子丸あ、

「お母^{つか}さんなのんねあけ。本^{ほん}当^{とん}に、大つき狐だけ。んだはげあえ、おらおかねあ

くて、逃^ねげできたあだ」

つけど。葛の葉あ、朝ま早ぐから晩まで、一生懸^け命^めなて機織てるおんだはげあえ、疲^{くた}びつで、知らねあうづん寝でしまて、何時^{こめ}がの^{あん}間、狐んなていだあだけどは。ほうして童子丸あ、大つき声出して叫^さがたおんだはげあえ、はつと目さましたけど。ほうして、

「ああ、童子丸に正^{しょう}体^{うて}みらつでしまたは。保名さんも童子丸あどがら、お母^{つか}さ

ん狐だけ、て聞っだべは。困こまたごどしてしまたは」

ど思たども、まだ、葛の葉んなて機織りしつたど。保名あ、

「童子丸。ほんたごどあねあはげあえ、まづ、早えぐ行て、お母さんがら乳つこもらてこえ。お父つあんど一緒え行てみんべ」

て、童子丸あどつ連で機屋えさ行たど。ほうして、

「ほーら、童子丸、お母さんつかいだべ。早えぐ乳こもらえ」

てやたど。童子丸あ、お母さんださ抱がて、えつべあ乳こもらて、ほれがら外えさ行て、保名ど遊あそんだけど。

ほのうづん、葛の葉家けあさ行て、長なんげあえ手紙書けあえで、元のおわ古巢のこの信田の森のさ帰かえて行てしまたあだけどは。ほうして、帰かえて行いく途中、童子丸あどご見みであえぐなて、戻もどて来たども、途中もまで来て、「こんげあえ未練のこが残てあ、とても別れらんねあ」もと思て、泣なきながら、まだ信田の森の方さ戻たど。んでも、なんぼ狐でも、親子一生のの別れだおん、行てはみだおのの、「童子丸あどご、なんとして、もう一度見ねあであ、どうしても別れらんねあ。まだこれまで仲むづます

ぐ夫婦でくらししてきた夫の保名さんごも、一目もう一度見ねあであ別れらんね」
どもて、まだ戻てきて、家の近ぐまで来て、樹の陰がらそつと見だど。「童子丸あ、
泣でねあべが、乳こおして探してねあべが」ど思てみだら、機嫌えぐ、保名どな
んにも知らねあで遊んでだけど。ほれ見つど、葛の葉あ涙出でなんすしても止ま
らねあけど。んだごであ、あど見らんねあ、ど思えば、胸あえつぺあなて、自然で
泣げでくるんだおん。ほうして葛の葉あ、泣ぐ泣ぐ信田の森さ帰て行たけどは。
童子丸あ、なんにも知らねあで、遊でいであえつたども、ほのうづん、虫の知
らへてでもゆたらええんだが、お母さんの顔見であえぐなて、機屋さ走して行た
ど。ほうして、機屋ん中見だど。んでもお母さんいねあおんだはげあえ、

「お母さんいねあ、お母さんいね」

て、保名どさ走してきたけど。保名あ、

「お母さんなの何処さも行がねあんだはげあえ、機屋にいねあば、家にいだべ。

家さ行てみんだ」

て、一緒ん家さ行てみだど。ほうして、

「お母さん。お母さーん」

て探したども、何処にもいねあけど。あつこつ探してみだば、手紙ああつけど。

保名あ、はつとして、ほの手紙開げでみだど。ほしたば、ほの手紙さ、

「保名さま。葛の葉は、お観音さまのお宮で、あなださまに助けらつた狐です。

そのおかげで、あなださまに、体中傷までつけらへで、誠に申すわけねあごどしあした。その恩返ししにど思^もて、和尚んなて、あなださまを助け、まだ葛の葉んなて、あなださまを看病し、夫婦んまでなて暮し、あなださまの子まで生^なして暮して来たなでした。んだおんださげあえ、あなださまもいどしし、童子丸あどごもめんごくで、とでも何としても別れらんねあなですども、葛の葉の正体狐だて分らつでしました今どなては、つらくて、このまま暮して行くごどあ出来^でねあぐなりあした。んださげあえ、私は元の古巢のある信田の森さ帰えりあす。どうが童子丸あどご風邪^{かじえ}ひがへねあよん、まだ腹痛であえぐしたり、怪我なのさへねあよんして、大つぎぐ育で下せあ。四つんなても、まだ乳^つこ飲む童子丸あどごあ、とでも手離す氣にあなれねあですども、私^{わたし}が連れてで行^えても、人^{ひと}としては育でら

んねあはげあえ、どうがよろすぐお願^{ねげ}あえしあす。若^もす、童子丸あ、乳こ飲みであえてきがねあ時^{つき}あ、一度だけあ乳こ飲まへっさげあえ、ほんずぎあ、どうが信田の森さ連^つできて下せあ。

へ恋しくば 訪ね来て見よ 信田が森へ」

て、涙の跡あつつこつつさつけっだ手紙だけど。なんぼが泣ぎであえがったんだおん。

保名あ、ほの手紙見っど、どでしてしまて、童子丸あ機屋で寝っだ狐見たていうな、やつぱり本^{ほん}当^とであえつたがど思^もて、がっかりしてしまたけどは。

「何もおれあ知らねあだし、童子丸だて、お母さんが本^{ほん}当^とあ狐だなて知らねあなだはげあえ、ほのままだんまて人^{ひと}なてればえがったべあ」

ど思^もたども、今さらなんずも仕方ねあんだし、童子丸どごむぞせあえぐなて、保名も涙出できてしかだねあがったけど。

ほうしているうづん、童子丸あ、

「お母^{つか}さん、乳こ飲みであえ、お母さん、乳こ飲みであえ」

て、葛の葉どごさがしったけど。ほんで保名あ、

「童子丸、童子丸。お母さんなあ、遠ぐさ行ていねあだはげあえな。大人しぐして待ちでろよ。今、お父つあん、飯食へつさげあえな」

て言たども、「お母さんの乳こ飲む。お母さん。お母さん」

て聞がねで泣ぐけど。なんぼお母さんいねあだて言て聞がへだてきがねあおんだはげあえ、保名も仕方ねあ、信田の森ていうどごさがして行たけど。

ほうして、信田の森さくつど、

「葛の葉、葛の葉いだが、葛の葉やあ、出はて来え」

て叫がだど。童子丸も、

「お母さーん、お母さーん」て叫がだど。ほうしたば、狐あ、葛の葉んなて出はてきたけど。ほしたば、童子丸あ、「お母さーん」ていうど、いぎなり走して行て、抱ぎづだけど。ほんで、三人あ其処で抱ぎあて泣だけどは。

ほれがら葛の葉あ、童子丸あどさ、えっぺあ乳こ飲まへで、飲まへ終つど保名どさ、

「保名さん、私わたしあ、こうして童子丸でえあどご抱であえでっど、めんごくでめんごくで、離でしであえぐねあだども、ほれも出来でねあべし、まして、あなだどは夫婦でだったおの、別でつだぐねあ。ほうして、このまま家で暮でしであえ」

て、泣なあえで言葉続ねがあぐなたけどは。ほうして、涙なのごて、

「んだてこうなてしまてがら、今さら戻るでごども出来でねあぐなてしまたしは、本当でん、あなたさまには命助でけらつで、お礼でのしょうもねあなです。今でもいろいろお世話でしであえども、もどもど私であ狐でだはげあえ、何時でがはこういう事でになるど覚悟ではしつたなです。覚悟ではしつたつもりでも、いざこうして別でれつどぎあ来てみつど、何でとが別でつだぐねあぐなりあす」

て、保名の袖でえしめで、ほの袖ねえき顔でえあでで、体でふるわへで泣でぐけど。保名も、葛の葉でえの肩抱ねえで泣ねえつだけどは。葛の葉でえあ、泣ねえぎながら、「これであ駄も目だ。どうせ一度別でんねあんねあだおん」ど思もて、思もいなおして、涙で拭でぎながら、「んでも、これも仕方でねあどです。別でれる時づきあ来たなですさげあえ、私わたしの事であ、どうか諦でめて下でせあは。どうが童子丸でえあどごよろすぐお願ねがえしあす。これきりで

後あ二度ど会えあへんさげあえ。ほれがら、これあ私の形見です。これあ、聞ぎ耳の頭巾ていうおんで、この頭巾かぶつと、なんと生物いきもののいう事でも、すっかり分なです。これかぶて、八卦おぎんて暮して下せあ。ほうすつど、日本一の八卦おぎんて、何不自由なく暮せあすさげあえ。どうが童子丸あどご、くれぐれもよろすぐお願えします。童子丸どあ、この姿で、このまま別れれば、童子丸あ、毎日お母さん、お母さんて、私どご呼ばて泣きあすべはげあえ、此処こゝで私のほんとの正体しょうたい見へで、おかねあがらへで別れんな、一番お互たがひ未練ねあぐ別れられる。ど思ひあすはげあえ、童子丸にあむぞせあす、私もつれあえども、ほうして別れらへでもらいあす」

て言ゆいながら、泣なっただけどは。んだべちやなや、親子夫婦の一生の別れだおの。ほうして、何時までも泣なっただて駄目ねえだと思たあだべ。ほのうづん、

「んであ、一生の別れですは」

ていうど、いぎなり、大つき狐んなて、本當ほんとの姿見へだけど。尾おつはなの三本もある狐だけど。ほうすつど、童子丸あどでして、おかねあがて、

「ああ、おかねあはおかねあは。お母さん、狐なたは。お父つあん、おかねおかね」

ていうど、保名どさたぐづえできたけど。ほのうづん、狐あ、信田の森の奥さ、しとつとびん跳とで行えてしまたけどは。ほんで、保名あ、おかねあどて泣く童子丸あどご、だましまし、家えさ帰けったけど。

ほうしてなあ、保名あ、葛の葉どから形見だてもらた聞き耳の頭巾づおの、試しにかふてみだど。ほしたば、やつぱり葛の葉ゆた通り、鳥がら雀がら、生物あだしやべるごどあ、何でもみな分わんなだけど。

ほんで、保名あ、ほれがら八卦おぎんなて童子丸あどご連つで、あつつこつつ八卦おえで歩ありて暮あしたけど。ほうしているうづん、保名ていう八卦おぎあ、大たいした八卦おぎだていう評判なたけど。ほんで、はやてはやて、暮あしに困るよだごどあねあがつたど。

ほうして暮あしたば、ある時とき、鳥あ二、三羽集あつまで、があがあ鳴ぐはげあえ、保名あ、鳥あだ何しやべったおんだべど思もて、聞き耳の頭巾かふて聞きてみだど。

ほしたば、一羽^{えっ}の鳥あ、

「殿さまあ、日本一の道庵という八卦おぎに、八卦おえでもらたば、奥方さまの病気あ、狐の生肝^{いぎきも}とて飲まへつど治るて言たそうだども、人^{しと}ずおのあ、おかねあおんだなや」

ていうけど。ほうしたば、別の鳥あ、

「ああ、あれが。あれなの十年も前^{めあえ}の話だべや。狐狩りしたども、狐あお観音さまのお宮^{へあえ}さ入てえて、保名という人に助けらつた話だべや」

つけど。ほしたば、まだ、別の鳥あ、

「日本一の八卦おぎだがなんだが知らねあども、あの道庵という八卦おぎも、ええかげんだ八卦おぎだおんだ。あんた八卦おぐはげあえ、奥方さまあ、治る病気も治へねあで、十年かがてもまだ治へねあんねあが。あれなの奥方^{えま}さまあ、今寝つた室の下さ、蛇ど蛙^{びつき}あ、あの御殿建でつ時^{づき}、生き埋^んめさつで、今だに、蛇と蛙あどご食うどて、二匹あ時々大喧嘩すつさげあえ、ほんで奥方さま病気んなて、まだ治らねあなよ。んだはげあえ、板敷ひつpegして、下の土掘^{つづ}て、ほの蛇ど蛙あ

どご、山さ放してせあもやつどええなよ。ほれ狐の生肝飲まへろ、なていうおんだはげあえ、治る病氣も治らねあんだはげあえ」

てしやべったけど。

ほんで保名あ、これあええごど聞だ。んであ早速お城さ行て、八卦おえだごどんして、教おへでくんべ。ていうごどんて、保名あ、お城さ行て、殿さまどさ、

「保名ていう八卦おぎあ来あした。聞ぐごによりますに、奥方さま病氣んなてがら十年にもなるそうです、まだ治らねあていう話ですさげあえ、八卦おえであげであえど思て来あした」

て言たば、殿さまあ、「奥方あ、なんだ医者みに診でもらても、日本一の道庵ていう八卦おぎに八卦おえでもらても治らねあ、これあええどさ来てくつだ。なんだ八卦おきだが、試してみんべ」ど思て、

「ああ、そうが、それはよぐ来てくれた。それでは早速お前の八卦おえでくれ」というごんて、奥方さまの顔見めへで、保名どさ八卦おがへだど。

ほうすつど、保名あ、すっかり改あらたまて、八卦おぐふりして見めへだど。ほうして、

「ああ、これあとでも考^{かんげあ}えらんねあごですども、奥方さまの寝ておられるこの室の下^{つづ}の土のそこ^{つづ}に、病氣の原因^{もと}あいるようすな。このご殿建でつ時^{つぎ}、知らねあで蛇と蛙^{びつき}あどご生き埋^んめしたので、二匹^{えま}あ今ではとても大つきぐなて、土の中で大喧嘩していいすな。それが奥方さまの病氣の原因^{もと}のようです。んだはげあえ、この室の板敷へがして、土掘て、土の中にいる蛇ど蛙あどご、山の中さ放してやれば、奥方さまの病氣あ、たづまづえぐなる、ど出あしたな」
て言^ゆたど。ほうしたば、殿さまあ、早速奥方さまどご別の室^{うづ}さ移して、ほの室の板敷ひつぺがさへで、ほの下^{もと}の土掘らへでみだど。

ほんでも、ながなが出はて来^こねあずおん。んでも保名あ、「必ず出つさげあえ、もと掘てころ」て、まだ掘らへだど。ほうしたば、やつぱり蛇ど蛙あ出てきたけど。ほれもすこであま大つきなだけど。ほんで、みんなたまげでしまたけど。ほうして、ほの蛇ど蛙、山の中さ放さへだど。

ほうしたば、奥方さまの病氣あ、一日ましんえぐなて、七日もすねうづん治たけどは。ほんで殿さまよろごで、えつぺあごほうびくっただけど。ほれがら保名あ、

日本一の道庵よりえれあ八卦おぎだていう評判なただ。

ほれがらなあ、保名あ、江戸さ出はて行たど。ほうして、童子丸あ十五、六ん
なつど、八卦おぎのごどすつかり教だど。ほうしたば童子丸あ利口だおんで、忽
づ一人前の八卦おぎんなただ、んだおんださげあえ、保名あ、八卦おぎのごどあ
童子丸どさまがへで、おわあ毎日酒ばり飲でただ。ほれも昼間だてかもわねあ
で、あつつの店、こつつの店で飲で歩りて、しめあにあ酔つばらて、人の家の軒端
んどさ寝だり、川んどこの土手んどさ寝だりしてんなただ。

ある時、江戸のお城で、お姫さま病氣んなて、なんと医者さかがたて治つずあ
ねあけど。ほんで、殿さま困て、八卦おぎに八卦もおえでもらたど。ほんでも皆
分らねあ、ていうばりただ。道庵も、なんぼおえでも分らねあけど。ほうして
お姫さまあ、だんだん悪ぐなんなただ。

ほんで、殿さま困て、どうしたらえがべて家来達さ聞だど。ほうしたば一人の
家来あ、

「保名ていう八卦おぎの名人の子供で、童子丸ていうな居あしたども、この童子

丸ていうのは、まだ子供だとも、保名以上の八卦おぎだていう評判の八卦おぎあいあすさげあえ、ほの童子丸に占なてもらたらどうですべ」

ていうけど。ほんで殿さまあ、童子丸あどごさがして早速連でこえて家来どさ言いづげだど。ほんで、家来達あ、童子丸あどごさがして、お城さ連で行たど。

ほうしたば、殿さまあ、早速童子丸あどごお姫さま寝つだどさ連で行て、お姫さまどご見へだど。ほうして、

「病人はこの通りだが、よく見て八卦をおえでもらいだい」

ていうけど。ほんで、童子丸あ、ええぐお姫さまの顔見ながら、

「ああ、これはお姫さまの顔ばかり見ても分らねあよだがら、どうがお庭先も見へで下せ」

て言たど。ほしたば殿さまあ、この八卦おぎあ妙なごどいうど思たども、障子あげらへで、縁側さ連で行て、お庭先見へだけど。ほんで童子丸あ、聞き耳の頭巾かふたまま、お庭見つだば、烏だあ、

「なあ、裏の大将。お姫さまどさ、なんば薬飲まへだて、治るおんでねあんだは

げあえなや」

つけど。ほしたば別の鳥あ、

「んだんだ。八卦おぎ達だて、何見で八卦おえでるおんだが、ええ馬鹿ばりそろてるおんな」

「んだなよ、なあに、お庭の一番大つき椿あ、お姫さまおわより綺麗だて言われるおんだはげあえ、椿あやぎもちやあえで、病氣んさへだなも知らねあでな。あの椿だて、春さぎんなつど、お姫さまに劣らねあ綺麗だ花咲がへんなだども、ほれ家来達あ、へづれあこえで、お姫さまさ、庭の椿だてかなわねあくれあ美すぐなたなて言うおんだおん」

「んだんだ。んだおんだはげあえ、あんた椿なの伐てしまて、枯らしてしまえばお姫さまそんまえぐなんのになあ」

「本^{ほん}当^とだ。あの椿あ悪^えぐねああだおん」

てしゃべったけど。ほれ聞ぐど、童子丸あ、まだお姫さまの室さ戻て、こんだすっかり八卦おぎの用意して八卦おえで、

「ああ、分りあした。家来達あ、お姫さまどご庭の椿の花ゆり綺麗だてあんまり賞めだおんださげあえ、椿あ口惜くやすがて、ほんでお姫さまどさ祟たたつたあです。んだはげあえ、あの椿せあえも伐れば、そんまえぐなりあす」

て言ゆたど。ほんで殿さまあ、家来さゆいづげで、ほの椿伐らへだど。

んでもなんずなおんだが、ほの椿あ、伐つても伐つても、くつでしまて、朝から晩まで伐たども、直ぐくつでしまて、元通りんなてしまうなだけど。んだおんださげあえ、殿さまほれ見で、

「童子丸。これあどうしたごどだ。これではどうにもならんではないか。どうすればいいんだ」

ていうけど。ほんで童子丸あ、

「八卦にはただ伐つて枯らせて出ただけですども、どうも、この様子だど、伐つたばりであ枯れねあようですさげあえ、何が一工夫しと欲ほしよです。もう一度心氣いづとをこらして占てみあす。それには、どうも夜がいいようです。庭の椿の側で、心をすづめで占てみあす。んだはげあえ、どうが明日の朝ままで猶予して下せあえ」

て言たど。^ゆ

ほうして、童子丸あ、ほの晩、暗くなつど、椿ぬ木の側さ筵敷で、聞き耳の頭巾かぶて正座していだど。ほうしたば、先づ近ぐのつづぎの精^{しやう}あ椿んどこさ来て、「まずまず、椿さんや。今日あ大変でしたな。一日中伐らつでなんぼが痛であがつたべあ、なんてあすや。お見舞^{めあえ}きあした」

つけど。ほしたば、椿あ、

「とでもとでも、痛であのなんのていうおんでねあがつた。まだ痛であくて泣ぎであよだおんだ」

て言たけど。ほうしたば、今度^{こんだ}あ、もぐれんの精^きあ来て、

「椿さん椿さん。今日あ見でいらんねがつた。おわ切らえるよだ気あしては、まずまずなんぼが痛であえがつたんだが」

「こげあえた目ん遇うどあ思わねあがつた。んでも童子丸ていう男あ、まだ子供だはげあえ、ただ伐れば枯れるどばり思てだはげあええがつたなよ。あれもう一工夫して、伐つど焼き、伐つど焼き、みな焼がつてみる、痛であえどこの話んねあ、

ほれごそみな枯らさつでしまたなよ」

てしゃべったけど。ほれ聞で童子丸あ、「これあえがった。ほげあえたごどすれ
ばええどあ分らねがったんだおん」ど思^もたけど。

ほうして、次の日童子丸あ殿さまさ、

「夕べな一晚^{しと}、椿ぬぎの側で、心気をこらして占なてみあした。ほうしたば確か
に伐ればええども、ただ伐ったばかりであ、ご覧のとおり駄目ですが、伐ったかだつ
ばしから焼けば、必ず枯れるど出あした。伐^{しと}る人、焼ぐ人で十人ばかり出して、伐
るど直ぐ焼がへで下せあ」

て言^ゆたど。

ほんで殿さまあ、早速家来に庭さ火たがへで、伐つど焚ぎ、伐つど焚ぎ、幹も
三つんも、四つんももえで火さくべてしまい、萌芽^{こよ}こあ出てくつどえぐねあ、て
いうなで、根つ子まで掘^{げあ}つくり返えして、みな火さくべで燃やしてしまたげどは。
ほうしたばお姫さまあ、次の日がらえぐなてきて、そんま治てしまたけどは。ほ
んで、童子丸あ噂の通り、たいした八卦おぎだ、これだば日本一の八卦^{いっ}おぎん相

違ねあていう折紙つけらっただけど。

ほうしたば道庵がほれ聞で、口惜くやすがて口惜がて、まず、あの童子丸あどさ八卦教おへだ保名どご憎え。あの保名せあえもいねあば、おれあ日本一だあだ。なんとしても生がしておがんねあていだけど。

ほれがら道庵あ、保名あ毎日あつつこつつで酒飲ありで歩て、酔っぱらうど、何処さだじやなく寝ありで歩ありぐていう話聞きで、さがしんえたど。ほうして、あつつこつつさがして歩たば、保名あ、堤つみの土手さ生えつた桜の木さおかがつて寝っただけど。ほんで道庵あ、保名の首、ぶつと切てしまたけどは。

ほうして、童子丸あどさ行えて、

「童子丸、童子丸。お前めあえのお父どつつあ、堤の土手で首切らつて、死んでだけぜあえは」

て教おへだど。ほしたば童子丸あ、

「おれあ家のお父つあなの、ほんたごとして死ぬ筈あねあ、人しとに恨みかうよだ人しとねあおん」

「言たど。ほしたば道庵あ、

「ほんたご言たて、なんだが知らねあども、げんにおれあ死んだどご見できたあだ」

「いうけど。ほんでも童子丸あ、

「ほんたごどあねあ、ほれあ何がの間違えだ。まだ生きつた」

「いや、死んだ」

「いや生きつた」

「て、論判なて、しめあえにあ道庵あ、

「んだら死んでだら、お前の首切んぞ、ほれでもええが」

「いうずおん。ほんで童子丸あ、

「あーえ。必ず生きつたはげあえ、もし生きつたら、道庵、お前の首切んぞ」

「言たずおん。ほんで道庵も、

「おれあ死んでだに見できたあだはげあえ、あんまりえ」

「いうごどんなて、二人あ堤んどさ行てみだど。ほしたば保名あ、桜ぬ木んど

さ寝っただけど。ほんで童子丸あ、保名の側さえて、

「お父^{どっ}つあ、目さまへは。寝るくれあ酔たながは、まず、目さましてころ」

て言^ゆたば、保名あ、ぱつとり目開^{あえ}で、もっこり起きできたけど。ほんで童子丸あ、

道庵さ、

「道庵さん、この通りだ。約束だはげあえ、お前^{めあえ}の首もらうぞ。えがべ」

て言^いたど。ほんで道庵も仕方ねあ、「んであえ」ていうなで、道庵あ童子丸に首切らっでしまたけどは。ほしたば、保名の首もぼろつと落^{おち}だけどは。とんぴんからんこあねあっけどは。

（集成一一六「狐女房」話者 高橋良雄

19 宝生の珠

むがしあつたけど。

むがしなあ、新庄しんじょうさ行ぐ途中えの塩野しやうのていうどさ、勘平かんへいていうとでも利口だ狐きつねあいであつたど。

ほうして、ほの勘平狐かんへいきつねあ、綺麗きれだ娘あねこんなたり、熊くまなて化くわげだりして、通とる人ひとんどご騙だましたり、威いしたりして、新庄しんじょうがら買物まちものしてきた塩引ししよひぎどが、油揚げだどが、美味んめあい物もの盗おのて食くてんなだけど。んだおんださげあえ、おかねくて誰たれも塩野通しとる人ひとあいなぐなたけどは。ほんで村々むらむらの人達ひとたちあ困こていたけど。

新庄しんじょうの殿とのさまほれ聞きで、ほの狐退治きつねぞうじしてくえるて、家来達連けらいだれんで行いたど。ほうして大勢たいせいの人達ひとたちあいだそだどぜいぶん随分ずいぶんさがしたども、とうどう見みつけかねでまたけどは。ほうすつど勘平狐かんへいきつねあ、まだ出ではてきて、人騙だましていだけど。

新庄しんじょうの円満寺えんまんじていうお寺てらの白念はくねんていう小僧こそうこあ、ほの話聞わたりきで、皆みなほんげあえ困こてんなだば、なんとがならねおんだがど思おもていだけど。

ほうして、ほの狐きつねあ宝生ほうせいの珠たまずおの持もてつさげあえ、人騙だますな上手じょうずだあだていう話聞わたりきたど。ほんで白念はくねんあ、勘平狐かんへいきつねあどから、なんとがして、ほの宝生ほうせいの珠取たまどりらねあんねと思おもたけど。ほうしてある時とき、和尚おしょうさんさ、

「和尚さん。どうか一日だけ暇くつでけらっしえ」

て願たど。ほしたば和尚さん、

「暇なのとて何するおんだ」

て聞ぐけど。ほんで白念あ、

「塩野の勘平狐あどご騙して、宝生の珠取てくんべと思てだ」

て言たど。ほしたば和尚さん、

「今まで何十人も人騙した程利口だ狐だおん、お前なの行たてなんずも出来るお

んでねあ、返て騙さえるばんだんだはげあえ、やめろやめろ」

つけど。ほんでも白念あ、

「いやいや、和尚さん。ものは試しというごどもあつさげあえ、どうがやらへで

ころ。ほれさ、人助けにもなんなだはげあえ、一日だけ、どうが暇呉てけらっしえ」

て頼んだど。ほんで和尚さん、

「狐に騙さえるばりしねあんだぞ」

て、暇くつだけど。ほんで白念あ、新庄の町で揚げだでの油揚げ十枚めえばり買て、

ほれぶら下げで塩野さ行^えたど。ほうして、酒ん酔たふりして、あっちゃよろばり、こっちゃよろばり、ふららふららど鼻唄がげでえたど。

ほうしたば、向うからめんごげだ娘^{あね}こあ来たけど。ほうして、

「白念さん、白念さん。どこまで行きあすや」
というけど。ほんで白念あ、

「白念白念で、気易ぐいうな勘平」

て、ずばり勘平の名前^{なまえ}言たど。ほしたば、

「あら嫌^やだごど。おらあ勘平でなのござへん。おらあおもよです」
つけど。ほうすつど白念あ、

「なえだどや勘平。ほんげあえ嘘^{うそ}こえだて、おれあつあだはだめだ。ほれこそ食いであえあだべ」

て、油揚、勘平あ鼻の先さ突出^{つた}してやたど。ほしたば勘平あ後^{うしろ}すこみして、

「なえーだて嫌^やだごど、おら勘平なのんねあ、おもよだじゅ」
というけど。ほんでも白念あ、

「ほんた嘘ずほこえだて駄目だ。ほれほれ。これ食いであえて、鼻ひくひくさへで尾おつぱまで出して、まず、後見んだ」

て言ゆたば、勘平あとうどう、かぶど脱えて、

「なんだて、白念さんにあかなわねあ、負まけだ負だ」

つけど。ほんで白念あ、

「勘平。ほんた人に見破れるよだ、下手だ芝居しんべあえなのすねんだ。おれあどご見んだ。

おれあこの衣着てるおんだはげあえ、どごさ行えたて酒だべあ、油揚げだべあ、自分おわお欲しおの只で手あさ入んだ。ええおんだべ。ああ酔た酔た」

て、酔たふりして、ふらつで見めへだど。ほしたば勘平あ羨しぐなて、ほの衣お欲しぐなたあだけど。ほんで、

「白念さんや、ほの衣ずあ、ほんげあええおのが」

て聞ぐけど。ほんで白念あ、

「こげあええおのあ、めったんねあおんだ。どごさ行たて、只でんめあえおの食うえさげなあ」

て言^ゆたば、勘^{かん}平^{へい}あ、ほの衣^お欲^ほしぐなて欲^ほしぐなては、

「ほんげあええ物^{もの}だごつたら、おれあどさも貸^かしてみでくんねあが」

ていうけど。白^{はく}念^{ねん}あ、

「ああ、貸^かしてもえ。貸^かしてもええども、世^よの中に二^{ふた}つどねあ宝^{おん}物^{ぶつ}だはげあえ、

只^{ただ}であ貸^かさんねあ。何^{なに}がよつぽ良^ええ物^{もの}持^もてこねあば、とでも貸^かさんねあな」

て言^ゆたば、勘^{かん}平^{へい}あ、なんとしてもほの衣^お欲^ほしぐなて、

「んだが、んであ、おれあ命^{いのち}ゆが大切^{たいせつ}だ宝^{おん}生^{せい}の珠^{しゆ}持^もてくる。ほの宝^{おん}物^{ぶつ}ど取^と替^かえん

べ」

ていうけど。ほんで白^{はく}念^{ねん}あ、惜^{いた}しよだ顔^{つら}して、

「なんぼええ宝^{おん}物^{ぶつ}だが知^しらねあども、この衣^おせあえもあれば、只^{ただ}飲^のみ食^くいあ出^で来^げん

なだはげあえなあ」

て、さもさも惜^{いた}しそん言^ゆたば勘^{かん}平^{へい}あ、なんたて欲^ほしぐなて、

「どうが、白^{はく}念^{ねん}さん、どうがほれ貸^かして下^{くだ}せあえ、頼^{たの}みあす」

て、きかねあけど。ほんで白^{はく}念^{ねん}あ、さも仕^し方^{はう}ねあよん、

「なんぼええ宝物たがらおんだがしらねあども、お前めあえ、ほんげあえいうなだば、仕方ねあ取り替げあえねあんねあべな。んであほれ持て来こえや」

て言ゆたば、勘平あ喜で、ほこほこて穴へさ入えて行えて、ほの宝生の珠持てきたけど。ほうして、白念の衣けあど取り替げあえだけど。

ほんで白念あ喜よつこで、早速お寺けあさ帰ええて行えて、

「和尚さん、和尚さん、まず、見でころ。勘平狐あどがら、これあ、宝生の珠取てきた」

て、見めへだけど。ほしたば和尚さん、

「あらら、えぐまず取てきたおんだ」

て、たまげだけど。ほうして、ほれ狐に取りげあえさえつどえぐねあ、ていうなで、お寺の蔵さしまておえだどは。

勘平狐あ、これあええ物おのもらたずおんで、早速ほの衣着て、新庄えさ行たど。ほうして、先ず油揚げ食いであえおんだと思もて、油揚げ手かげだら、店めへの人しとに見つけらつて、

「あらあらつ、狐あ衣なの着て、油揚げつごだじゆは、この畜生あ」

というど、棒でただぎづげらつで、ようよう逃げて来たけど。

ほうして、豆腐屋であんまぐいがねあがつたども、魚屋だばんまぐえぐんねがど思て、今度あ魚屋さ入て行て、店さ出した塩引の大つきなかぶづで、ほれ引張るかんじよしたば、まだ見つけらつで、

「衣着た狐あ塩引、引張てえぐどごだ、この畜生あ、ただぎづげでくえつが」

ていうど、いぎなり天秤棒で、ありつたげしはだぎづげらつで、跛ひぎひぎ漸く逃げできたけど。ほうして、あちこちでただがつで、何にも盗りかねあで、穴さ来て、体中痛であおんだはげあえ、うー、うーてうなて寝ただけどは。

ほうして寝でで、白念に騙さつだあだてさどたけど。ほんで寝ながら、あの宝生の珠、白念から、なんとがして取り返えさねあんねあどもて考あえつだけずおん。ほうして、白念の母親んなて行くな一番えど思ていだけど。

暫ぐして、勘平狐あ体の痛であえな治つど、早速母親んなて、円満寺さ行たけど。

「はえつと。白念あいだべが」

て言^ゆたば、白念あ出はてきて、

「あら、お母^{かがつつあ}さんねあがや。ないしん来たな。まず入^{へあ}れ」

て、勘平狐あどご入^あらへだど。ほしたば勘平あ、

「お前^{めあえ}、塩野の勘平狐あどがら、宝生の珠ずおの取てきたったんねあがや。お母^{かがつつあ}さん、ほれあな^{めあえ}んたおんだが見であえて来たあだ」

つけど。ほんで白念あ、

「あれあ大事^{であえし}だおんで、和尚さんにしまてもらつてだあだはげあえ、見^めへらんねあなだ」

て言^ゆたば、母親^{めあえ}んなた勘平あ、

「なあ、白念や。おらあ一生の思い出^{いづと}ん、宝生の珠じゆおの、なんとがしてな^もんたおんだが、一度^{いつと}見でおぎであえおんだと思^もて、来てみだなよ。他の人^{しと}んねあおん、お前^{めあえ}えのかがつあだおん。ちよこつとでええはげあえ、見^めへでくつちやや」
て言^ゆたおんだはげあえ、白念あ嫌^やんだて言^ゆいかねで、蔵がら出してきて、離^ゆつ

だ所^どから、手^たさ持^もて、見^めへだど。ほうしたば、勘平あ、

「おれも年^{とし}寄^よてしまて、目^{まなこ}あえぐねぐなては、ほんげあえ離^{はな}つた所^どからだば見ねあなよ。折角^{へつかぐ}見^みへでくえんなだば、もと近^きぐさ置^おえで見^みへでころや」

つけど。白念あ、自分^{おわ}えの母親^{おむすめ}だおんだし、しかだねあど思^{おも}て、母親^{おむすめ}の目^めの前^{まへ}さ置^おえで見^みへだど。ほうしたば勘平あ、

「これあ、おれあ珠^{たま}だつ」

ていうど、いぎなりほの珠^{たま}くわあえで、一^{ひと}跳^ととんで走^{はし}て行^いてしまたけどは。白念あ、足踏^{あしふみ}みして口惜^{くし}しがたて駄目^{だめ}だずんだ。ほんで白念あ、なんとがして、勘平狐あどがら、あの珠^{たま}とつ返^{かへ}えさねあんねあど思^{おも}て考^{かんが}えだど。

ほうして、まだ、和尚^{おしょう}さんがら一日^{いちにち}暇^{ひま}もらて、今度^{こんど}あ、神主^{かみね}さんどき行^いて、烏帽^{えぼし}子^こと白え着^き物^{もの}借^かりて、紺^{くろ}の袴^{はかま}へあえで、塩野^{しおの}の勘平狐^{かんぺいこ}あ穴^{あな}んどき行^いて、

「勘平出^ででこえ、勘平出^ででこえ」

て、大^{おほ}つき声^{こゑ}で叫^さがだど。ほしたば、「はえ」て、勘平あ出^ではてきたけど。ほんで白念あ、

「これ、勘平、おれは仙台の竹駒稲荷なるぞ。お前は白念とがいう小僧に騙され、宝生の珠をとられたということだが、それは本当の^{ほん}ごどが」

て言^ゆたば、勘平あ恐^おねあくて、ありつたげ小^ちつちやこぐなて、頭下げで、小^ちつちやえ声で、

「はえ、そうです。んでも取り返^げえしてきあした」

つけど。ほんで白念あ、

「そうが、それが本^{ほん}当^{とう}どあれば致^{いた}し方^{かた}ない。そんな小僧に騙されるような者^{もの}に大事^{だいじ}な宝生の珠を預けておぐわけにはいがない。お前の性根の治るあいだ、七日のあいだ、おれが預^{あづか}がつておぐ。七日たつたら心を入れ替^かえて取りに來い。もし嫌^{きら}だなんていうなら、これからは、一切お前の食^けう物^{もの}が手に入らないようにしてやる。それでもええが。だがら早く珠を持^もつて來て、おれに渡^{わた}せ」

て言^ゆわつて勘平あ、弱^おて、仕方ねあぐ穴^{あな}さごそごそと入^いてえて、宝生の珠持^もてきて、白念どさ渡^{わた}してしまたけどは。

白念あ、今度^{こんど}こそ取^とつ返^{かへ}えさんねあよんしねあんねあど思^{おも}て、ほの珠、和尚さ

んに蔵さ入つでもらて、錠かげでおえだど。

勘平狐あがつかりしてしまて、早ぐ七日ただねあがど思て、七日くんなばあり待っただけど。ほのうづん七日も過ぎだずおん。ほうすつど勘平あ早速穴がら出はてきて、仙台さ走して行たど。ほうして、

「塩野の勘平です。この間、預がてもらた宝生の珠、心入れ替で七日過ぎあしたはげあえ、もらいん来あした」

て言たど。ほしたば、竹駒のお稲荷さんが、
「なにっ。宝生の珠をおれが預がたて」

つけど。ほんで勘平あ、

「七日前に塩野さ来て、持てきあしたべ。」

て言たべ。ほうすつどお稲荷さん、ごしえで、

「なに馬鹿だごどいう。おれあ何時塩野さな行たて、お前という奴は、どごまで馬鹿な奴だ。こらっ勘平、お前は一度ならず二度もそんな小僧に騙されるなて、なんというごどだ。狐が人を化がすのなら分る。それをなんだ、あんな小僧に二

度も騙されるなんて、全くけしからん奴だ」

て、勘平あさん怒こしやがつでしまたけどは。ほんで勘平あ、すごすご帰けあえるかんじよしたば、お稲荷さんが、

「勘平、一寸待で。ただ帰ええて行たてろぐだ考げあえ出ねあべあ、おれあええごど教へでやる。ええが、今度あ、新庄の殿さまんえなて、行列つくて行えげ。殿さまだば、偉えれあはげあえ宝生の珠見へゆろて言えゆば、和尚だやて嫌やだゆて言えねあ。ほれさ油揚汁ずるどが精進料理出して待遇すんべさげあえ、殿さまんえなて行えげ」

て教へでよよつしごしたけど。

ほんで勘平あ喜よつしで帰けあえて来たけど。ほして帰えてくつど直ぐ塩野あだりの、山どが沢にいだ狐達だあどご集あべで、行列つくて、円満寺さ行えぐ相談したど。ほんで皆、ごつとお食ええずおんで、喜で行ぐごどんしたけど。

ほしたば、ほの中に一匹、跛えだないだけど。ほんで勘平あ、皆どさ、

「新庄の殿さまの家来ん中に、跛えだないだべがや」

て聞いだど。ほしたば、

「いねあな」

ていうけずおん。ほんで勘平あ、

「跛だ家来あいねごつたら、跛どご連で行て、和尚に分らえつどえぐねあはげあえ、この度あ跛に拔げでもらわねあんねあんだなあ」

て、跛狐あどご連で行がねあごどんしたけどは。ほうして、明日行くごどんしたけど。

ほんで跛狐あ、折角行列さ交て行て、んめあえおの食うえど思て喜でいだな、連で行がんねあて言わつたおんだはげあえ、面白ぐねあくて、ごしやげでごしやげで、

「ようし、野郎達、明日見でけづがれ」
て、ふん。ふんごへあで、ほこがら帰えつど、すぐほの足で、円満寺さ行て、和尚さんどさ、

「和尚さん、和尚さん。明日勘平狐あだ十匹ばり、新庄の殿さまん化げで、宝生の珠とりんくつさげあえ、犬こえつぺあ集べできて、ほれ室さ入でやて食つ殺さへろ」

て教へだずおん。

ほんで和尚さん、ほれあ大変だていうなで、次の日早く、檀家がら犬こ十二、三匹集べできて、裏さかぐしつたど。

勘平狐あ、皆どさ露の葉かぶへで、ほれ陣笠んして、萱腰さ、ささへで刀んして、皆さむれあん化げらへだけど。ほうして、駕籠まん中んして、供そろえで、円満寺の方さ出がげだけど。ほうして、

「下におろう、下におろう」

て叫がびながら、お寺さ入^へて行たけど。

ほんで和尚さん、殿さまどごさ出^えはて行て、

「なにご用でござりあしたなですべ」

て聞だば、家来あ、

「このたび殿さまあ、ごのお寺の白念という小僧が、塩野の勘平狐がら宝生の珠どがいうものを騙しとつたという話を聞たので、ぜひそれを拝見したいと仰せられるので、まがり越した次第である。じゃによって、ぜひその珠を見せでもら

「いだい」

ていうけど。ほんで、和尚さん、「宝生の珠どきたな、これあやつぱり勘平狐が化げで来たのに相違ねあ」^も 思ったども、知らねあふりして、

「はえはえ、宝生の珠は蔵さしまてあすはげあえ、今出してきあす。ほれさ殿さま折角^{へっかぐ}お出でになてくつだあですさげあえ、酒肴も用意さへあすさげあえ、少々お待ちになて下せあえ」

て、引込できて、狐だ入^あった室の戸という戸さ、みな心張^{つっぱり}かて、裏がら犬こあだどご連^つできて、穴こがらほの室さ入^あでやて、穴こくえでまたけどは。

ほうしたば、中で犬こあ、わんわんていうべし、狐こだ、きやんきやんていうんだが、室の中あがだんがだんて、すさまず音あすつけど。ほうして、暫ぐしたば、音あすねあぐなてしまたけどは。ほんで和尚さん開げでみだば、狐こあだ、みな犬^{おの}こに食^くつ殺さつでしまていだけどは。ほれがら、ほの宝生の珠あ、円満寺の宝物^{おの}んなたあだど。とんぴん からんこあ ねあつけどは。

（集成二八四、二九七「隠れ頭巾」「坊様と狐」話者 高橋良雄

あとがき

『及位の昔話（一）』をガリ版で完成した直後、高橋さんから、厚い『及位の昔話（二）』の原稿がとどき、続いて、第三集の原稿も届けられた。昔話に打ち込んでいられる姿に頭のさがる思いをした。さっそくガリ版にと考えたが雑用のために遅々としてすすまず、ようやく第二集まで進んだことを報告できるのはうれしい。ゆくゆくは真室川町の文化遺産として保存されるべきと考えている。続けて第三集にとりかかる予定である。

なお、第一集上梓後、高橋さんより、第一集の話者についてご注意があったので、書いておきたい。（なおこの点については連絡不十分で、話者を入れなかったのは編者武田の責任である。おわび申し上げます。）なお二集からは文末に記した。

第一集

- 1 修験者と大蛇 (高橋良雄)
- 2 豆こむがし (高橋良雄)
- 3 よごばり和尚 (高橋キク)
- 4 小間物忠兵衛 (栗田チウ)
- 5 化げおのむがす (佐藤フタヨ)
- 6 天狗むがし (高橋良雄)
- 7 簪えらび (高橋良雄)
- 8 馬鹿簪ばなし (中川チャウ)
- 9 蛇んであえんなたと蔵 (高橋良雄)
- 10 鳥こむがし (高橋良雄)

武
田

正

及位の昔話（二）

昭和五十五年九月二十日 発行

話著者 高 橋 良 雄

編 山形民話の会・武 田 正

南陽市赤湯三一八〇―四

山形短期大学民話研究センター資料叢書

高橋良雄さんの

及位の昔話（二）

＊本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

なお、本書の底本には、山形県立図書館所蔵本を使用しました。
ご協力下さいました山形県立図書館に御礼申し上げます。

平成十九年七月二十日

山形短期大学民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

山形短期大学附属図書館内

（電話）〇二三―六八八―七五四四

山形短期大学民話研究センター資料叢書 既刊（再刊順）

- 『西川町の昔話』（一九七五年九月発行、二〇〇六年三月再刊）
『むかしあったけど』（一九七五年二月発行、二〇〇六年三月再刊）
『米沢市築沢の昔話』（一九七二年十一月発行、二〇〇六年三月再刊）
『米沢市塩井の昔話』（一九七三年十一月発行、二〇〇六年三月再刊）
『安楽城の伝承（一）』（一九八四年四月発行、二〇〇六年三月再刊）
『安楽城の伝承（二）』（一九八五年四月発行、二〇〇六年三月再刊）
『安楽城の伝承（三）』（一九八五年十月発行、二〇〇六年六月再刊）
『高畠町和田の昔話』（一九七九年八月発行、二〇〇六年七月再刊）
『及位の昔話（一）』（一九八〇年八月発行、二〇〇六年七月再刊）
『及位の昔話（四）』（一九八〇年十二月発行、二〇〇六年十月再刊）
『及位の昔話（五）』（一九八一年二月発行、二〇〇六年十月再刊）
『佐兵ばなし』（一九七一年一月発行、二〇〇七年四月再刊）
『まま子いじめ 米沢市六郷・宮井の昔話（一）』（一九七四年四月発行、二〇〇七年四月再刊）
『かつぱの硯 長井市・米沢市六郷の昔話』（一九七四年七月発行、二〇〇七年四月再刊）
『行けざんざん 小国町昔話集』（一九七六年九月発行、二〇〇七年四月再刊）
『お婆の手箱（一） 阿部キヌオさんの語り』（一九七七年四月発行、二〇〇七年七月再刊）
『及位の昔話（二）』（一九八〇年九月発行、二〇〇七年七月再刊）
『及位の昔話（三）』（一九八〇年十月発行、二〇〇七年七月再刊）

